

東大阪市下水道事業関係 発掘調査概要報告

— 1991年度 —

1992. 3

財団法人 東大阪市文化財協会

はしがき

東大阪市の下水道は、西地区のほぼ全域と中地区の一部に普及し、現在は中地区から東地区にかけて工事が急がれています。そのため、本市の周知する遺跡内での工事計画も年毎に増加しつつあります。

このような状況のなかで、下水道工事の円滑化と埋蔵文化財の調査・保存を図るために、東大阪市教育委員会と財団法人東大阪市文化財協会および東大阪市下水道管理者の3者は、平成2年度より20年間におよぶ調査体制と調査計画を検討し、その結果平成2年10月29日に基本協定を締結しました。そして、この協定に基づいて従来は単独事業として実施していた発掘調査を年度計画として立案し、工事計画との調整を行ないながら逐次実施することとしました。

基本協定に基づく下水道関係調査の2年度めにあたる平成3年度は、本書に収めた8件の発掘調査をはじめ、試掘・立会調査を加えた多くの調査を実施しました。調査は、幅1m前後の下水管埋設部分あるいは推進工法による立坑部分という限定された範囲で行なわれたものでしたが、弥生時代～江戸時代の多くの遺構・遺物が検出され、これまで知られていなかった新たな事がいくつも明らかとなりました。東大阪市に下水道が普及し、それに伴って発掘調査を行なうことで、東大阪市の詳しい歴史も明らかになっていくものと確信しております。多くの発掘成果を収めた本書が、郷土史理解の助けとなり、また埋蔵文化財の保護に役立つものとなれば幸いと存じます。これらの調査を実施するにあたり、ご協力を賜った関係各位に対して、厚くお礼申し上げますと共に、今後いっそうのご支援をお願い申し上げます。

平成4年3月31日

財団法人東大阪市文化財協会
理事長 森分 最

例　　言

1. 本書は財団法人東大阪市文化財協会が、東大阪市の委託を受けて1991年度に実施した下水道管渠築造工事に伴う発掘調査の概要報告書である。
2. 本書には、上小阪遺跡第4次調査・上六万寺遺跡第3次調査・瓜生堂遺跡第39次調査・巨摩庵寺第7次調査・若江遺跡第45次調査・若江遺跡第46次調査・若江遺跡第47次＝山賀遺跡第5次調査の合わせて7報告をおさめた。このほかに、1991年度に実施した下水関係の試掘立会・夜間調査など本格調査以外の調査一覧表を第1章に掲載した。なお、若江遺跡第45次調査は前年度からの継続事業であり、また若江遺跡第47次＝山賀遺跡第5次調査は次年度に継続される事業である。これらの調査の全体については、事業の性格上各年度の報告書にまたがることをご容赦願いたい。
3. 発掘調査並びに整理作業は以下の体制による。(1992年3月31日現在)

理事長	森分 最	(東大阪市教育委員会教育長)
常務理事	西脇 実	
事務局長	池田和幸	(東大阪市教育委員会文化財課長)
調査部長	原田 修	(東大阪市教育委員会文化財課主幹)
調査部員	上野節子	
庶務部長	下村晴文	(東大阪市教育委員会文化財課主査)
庶務部員	大林 亨	朝田直美
4. 本書の執筆は次のとおり。なお、編集は芋本が行なった。

第1章～第3章	芋本隆裕(東大阪市教育委員会文化財課主任)
第2章	上野利明(東大阪市教育委員会文化財課)
第4章～第6章	金村浩一
第7章～第9章	井上伸一
5. 遺構実測の基準には国土座標第VI系を使用し、図中の方位は特に表記のないかぎり、国土座標北を示す。水準高にはT.P.値を用いた。土色名は農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に準じた。
6. 本書に収録した写真のうち、遺構写真是各担当者が撮影し、遺物写真は㈱スタジオジーエフプロに委託して撮影したものである。

本文目次

第1章 平成3年度の調査経過.....	1
第2章 上小阪遺跡第4次調査.....	3
1 はじめに.....	3
2 調査概要.....	4
1) 基本層位.....	4
2) 遺構.....	5
3) 遺物.....	6
4) まとめ.....	8
第3章 上六万寺遺跡第3次調査.....	9
1 はじめに.....	9
2 調査結果.....	10
3 出土遺物.....	11
4 まとめにかえて.....	14
第4章 瓜生堂遺跡第39次調査.....	15
1 はじめに.....	15
2 調査概要.....	16
1) I区.....	16
2) II区.....	17
3) III区.....	18
3 おわりに.....	18
第5章 巨摩庵寺遺跡第7次調査.....	19
1 はじめに.....	19
2 調査概要.....	21
1) I区.....	21
2) II区.....	22
3) III区.....	22
3 おわりに.....	22
第6章 若江遺跡第45-1次調査（その2・出土瓦類）.....	23
1 はじめに.....	23
2 瓦類.....	23
3 おわりに.....	24
第7章 若江遺跡第45-2次調査.....	29

1	はじめに.....	29
2	調査結果.....	29
3	立会.....	33
第8章	若江遺跡第46次調査.....	35
1	はじめに.....	35
2	A地区の調査結果.....	36
3	B地区の調査結果.....	38
4	出土遺物.....	39
5	立会.....	42
6	まとめ.....	42
第9章	若江遺跡第47次・山賀遺跡第5次調査.....	43
1	はじめに.....	43
2	B地区の調査結果.....	44
3	C地区の調査結果.....	45

挿図目次

第1図	周辺遺跡分布図(1/50,000).....	3
第2図	調査地点位置図(1/2,500)・基本層位図	4
第3図	遺構平面図・断面図西半(1/80).....	折込み
第4図	遺構平面図・断面図東半(1/80).....	折込み
第5図	井戸1出土遺物実測図(1/3).....	7
第6図	上六万寺遺跡位置図(1/25,000).....	9
第7図	上六万寺遺跡第3次調査地位置図(1/600)	10
第8図	地層断面図(1/40).....	10
第9図	弥生土器・磨石実測図(1/4).....	12
第10図	土師器・須恵器実測図(1/4).....	13
第11図	調査地位置図.....	15
第12図	調査区位置図(1/1,000)	16
第13図	調査区土層図(1/100).....	折込み
第14図	II区南部平面図(1/200)	17
第15図	II区土層断面図(1/50).....	18
第16図	調査区位置図.....	19
第17図	調査区平面図(1/500)	20
第18図	土層柱状図(1/40).....	21
第19図	出土瓦類実測図1(1/4).....	25
第20図	出土瓦類実測図2(1/4).....	26
第21図	出土瓦類実測図3(1/4).....	27
第22図	出土瓦類実測図4(1/4).....	28
第23図	調査地平板実測図(1/800)	29
第24図	断面図(1/40).....	31
第25図	遺構平面図1(1/100)	32
第26図	遺構平面図2(1/100)	折込み
第27図	若江遺跡第45-1次・第45-2次調査地位置図(1/2,500)	34
第28図	調査地位置図(1/2,500)	35
第29図	A地区南壁断面図(1/80)	36
第30図	A地区遺構平面図(1/60)	37
第31図	B地区位置図(1/200)	38
第32図	B地区南壁断面図(1/80)	38

第33図	A地区土壤1出土遺物実測図(1/4).....	40
第34図	A地区包含層出土遺物実測図(1/4).....	41
第35図	B地区包含層出土遺物実測図(1/4).....	41
第36図	調査地位置図(1/2,500).....	42
第37図	B地区遺構平面図(1/200).....	44
第38図	B地区断面図(1/40).....	44
第39図	C地区断面図(1/40).....	45
第40図	C地区遺構平面図(1/100).....	46

表 目 次

第1表	平成3年度下水道関係調査一覧表.....	2
第2表	包含層遺構面一覧表.....	30

図版第目次

- 図版第一 上小阪遺跡第4次調査 1 溝2
2 土壙3
- 図版第二 上小阪遺跡第4次調査 1 溝6断面
2 溝6断面
- 図版第三 上小阪遺跡第4次調査 1 井戸1
2 井戸1内網籠検出状況
- 図版第四 上小阪遺跡第4次調査 1 西半部断面
2 西半部柱穴検出状況
- 図版第五 上小阪遺跡第4次調査 遺物 壺・甕・鉢・高杯
- 図版第六 上小阪遺跡第4次調査 遺物 1 壺
2 壺・甕・鉢・高杯
- 図版第七 上六万寺遺跡第3次調査 1 調査風景(調査地中央部)
2 調査風景(試掘地点付近)
3 地層断面(調査地西部)
- 図版第八 上六万寺遺跡第3次調査 遺物 弥生土器・土師器・須恵器
- 図版第九 上六万寺遺跡第3次調査 遺物 1 弥生土器
2 弥生土器・磨石
- 図版第十 上六万寺遺跡第3次調査 遺物 1 須恵器
2 土師器・馬齒
- 図版第十一 瓜生堂遺跡第39次調査 1 II区調査風景
2 III区現代水路
3 III区南壁土唇
- 図版第十二 瓜生堂遺跡第39次調査 1 II区北部子持壺出土状況
2 II区北端部土器出土状況
3 II区南部4層上面
- 図版第十三 巨摩磨寺遺跡第7次調査 1 III区掘削状況
2 No2地点堆積状況
3 I区調査風景
- 図版第十四 若江遺跡第45-1次調査 1 平瓦
2 平瓦
- 図版第十五 若江遺跡第45-1次調査 遺物 軒瓦・平瓦
- 図版第十六 若江遺跡第45-2次調査 1 断面I

2 断面 II

- 図版第十七 若江遺跡第45-2次調査 1 井戸 1
2 井戸 3 立ち割り
- 図版第十八 若江遺跡第45-2次調査 1 ピット 4~6
2 土壌 4
- 図版第十九 若江遺跡第45-2次調査 1 弥生人足跡
2 包含層内遺物出土状況
- 図版第二十 若江遺跡第46次調査 1 立会調査風景
2 A 地区土壌 1
- 図版第二十一 若江遺跡第46次調査 1 A 地区土壌 1 断面
2 A 地区土壌 1 内遺物出土状況
- 図版第二十二 若江遺跡第46次調査 1 A 地区南壁断面上部
2 A 地区南壁断面下部
- 図版第二十三 若江遺跡第46次調査 1 B 地区南壁断面上部
2 B 地区南壁断面下部
- 図版第二十四 若江遺跡第46次調査 遺物 A 地区土壌 1 出土遺物
- 図版第二十五 若江遺跡第46次調査 遺物 1 A 地区土壌 1 出土遺物
2 A 地区土壌 1 出土遺物
- 図版第二十六 若江遺跡第46次調査 遺物 1 A 地区包含層出土遺物
2 A 地区包含層出土遺物
- 図版第二十七 若江遺跡第46次調査 遺物 1 A 地区包含層出土遺物
2 B 地区包含層出土遺物
- 図版第二十八 若江遺跡第47次・山賀遺跡第5次調査 1 B 地区調査地遠景
2 B 地区基本層序
3 B 地区杭
- 図版第二十九 若江遺跡第47次・山賀遺跡第5次調査 1 C 地区井戸 1 上段
2 C 地区井戸 1 下段
3 C 地区溝 1・ピット 1

第1章 平成3年度の下水道関係調査について

平成3年度は、第1表に掲載する発掘調査・試掘調査・立会調査を実施した。このうち発掘調査は8件をかぞえたが、下水道部による工事計画策定後に諸般の事情により着手時期が遅れた工区が多く、調査が次年度にまたがるものも生じている。今年度に調査した遺跡は、若江遺跡4件（一部が山賊遺跡に含まれる1件を含む）、巨摩廃寺遺跡・上小阪遺跡・上六万寺遺跡・西之辻遺跡が各一件である。若江遺跡での調査が多いが、これは遺構面が浅いこと、若江旧村と重なりあって若江城関係や中世～近世集落跡が埋められているため下水道事業の進展に伴って、道幅の広い道路での発掘調査から細い路地を網目状に結ぶ下水工事に伴う発掘調査へと比重が移りつつあることなどによる。今年度実施した若江遺跡の調査のうち、推進工法の立坑部分を対象とした第45次調査の一部・第46次調査を除く他の調査地は、いずれも幅1m前後の掘削トレーニにより道幅が一杯となるような狭い道路での調査であった。今後、ますます細い路地へと下水工事が進み、それに伴って掘削トレーニ幅も減少すると予測されるところから、狹小な場所での発掘方法を早急に確立する必要があろう。また、今年度において若江遺跡の調査は、従前より継続する若江北町一帯のほかに若江南町でも本格化し（第46次・第47次調査）、さらに4月に実施した試掘調査により若江南町一帯で発掘調査が必要と判断されている。これに若江北町の路地部の調査がなお多数残されていることを合わせると、今後当分のあいだ下水道関係発掘調査は若江遺跡を中心として実施されるものと思われる。

東地区での下水工事に伴う発掘調査が今年度より開始されたことも、特記すべきである。その第1号として土木工営所の所管による上六万寺遺跡の調査が実施された。今後、下水道の普及が中地区より東地区に移っていくことから、次年度以後も東地区での調査は増加するものと思われる。東地区とりわけ生駒山麓部において発掘調査を行なう場合、東西方向の下水管管理設工事は管路の傾斜を自然地形の勾配よりも緩くするために、人孔を多数設けて人孔毎に階段状に掘削されることが多い。上六万寺遺跡では、管路底がGL-1.2mから-2mのあいだを上下するものであった。そのため、工事の掘削底までの調査を行なう場合、自然堆積層のなかでGL-1.2m以下の地層については調査区全体で確認できないという制約を感じる。今後、遺存状態の良好な遺構や遺物包含層が検出された際に、工事の掘削範囲だけの調査では遺構や包含層が分断されてしまう可能性も考えられるところから、山麓遺跡の調査においては出来るかぎり遺構や包含層を完掘できるよう、事前に工事関係



若江遺跡調査風景（第48次調査）

調査名	担当	面積	調査期間	備考
若江遺跡第45次	井上	180m ²	H 3・3/4~7/28	前年度より継続。第6章に一部を報告
巨摩庵寺第7次	金村	—	H 3・5/13~8/7	立会調査・第5章に報告
若江南町一帯	芋本	—	H 3・4/15~4/19	試掘調査21ヶ所
瓜生堂遺跡第39次	金村	150m ²	H 3・8/23~10/17	第4章に報告
若江遺跡第46次	井上	47m ²	H 3・9/11~10/21	第7章に報告
上小阪遺跡第4次	上野	244m ²	H 3・10/18~H 4・1/27	第2章に報告
上六万寺遺跡第3次	芋本	50m ²	H 3・11/5~11/15	第3章に報告
若江遺跡第47次 山賀遺跡第5次	井上	376m ²	H 3・12/2~継続	次年度に継続。第8章に一部を報告
若江遺跡第48次	金村	82m ²	H 4・1/18~継続	次年度に継続。次年度に報告予定
西之辻遺跡第34次	芋本	30m ²	H 4・2/10	夜間調査。遺構面は削平・擾乱
鬼虎川遺跡第34次	金村	200m ²	—	次年度に継続

第1表 平成3年度下水道関係調査一覧表

者と十分に協議する必要があろう。

交通事情等から夜間にしか調査を実施できない箇所もある。今年度は西之辻遺跡第34次調査で立坑1ヶ所、瓜生堂遺跡で管路部試掘調査などが行なわれた。前年度は若江遺跡でも実施されており、他市の例よりも今後夜間調査の件数は増加するものと思われる。調査期間によっては、調査体制や調査方法の点で検討すべき課題は多い。

試掘・立会調査は、発掘調査の場合に適宜実施した。発掘調査が必要かどうか判断するための試掘調査の場合、地表下2m以内の浅い遺跡についてはほぼ確実に有無が判断できたが、立坑工事など深い掘削に伴う調査が必要かどうかの判断については通常行なわれる試掘では確認し難いところから、過去の近隣における調査結果をもとに判断することとした。近隣での調査例がない地点においては、工事に伴う立会調査によって遺跡の有無を確認し、事後の措置に資することとした。また、遺跡内であっても発掘調査を実施する必要がないと判断された工事については、掘削時に立会調査を実施し、地層観察と遺物採集に努めた。立会調査で遺物が出土した場合には、その概要を本書に収録し、調査次数を冠することとした。(巨摩庵寺第7次調査がこれに該当する)



夜間調査風景(西之辻遺跡第34次調査)

第2章 上小阪遺跡第4次調査

1 はじめに

上小阪遺跡は、現在の行政区画では東大阪市若江西新町4・5丁目、宝持3丁目、東上小阪、新上小阪を中心として広がっている。本遺跡は旧長瀬川分流の自然堤防上に立地しているとされ、現在の地表面でT.P.3.5m前後である。

現在までに3回の調査が実施されているが、いずれの調査も規模が小さく、部分的なものであったため、遺跡全体を把握できるには至っていない。その中で、第3次調査では弥生時代後期から中世の遺構、遺物が検出され、遺跡の東限を確認している。

今回の調査地点は、東大阪市若江西新町4丁目に位置し、第3次調査の北方約120mの地点にあり、東西方向にほぼ並行している。現在は用水路として使用されている。

調査の規模は、長さ約170m、幅約1.3m、深さ2.1-2.3mの規模である。この内、約100mについて発掘調査を実施し、東西端70mについては断面観察・試掘を含む立会調査とし、遺跡の範囲確認を主目的とした。



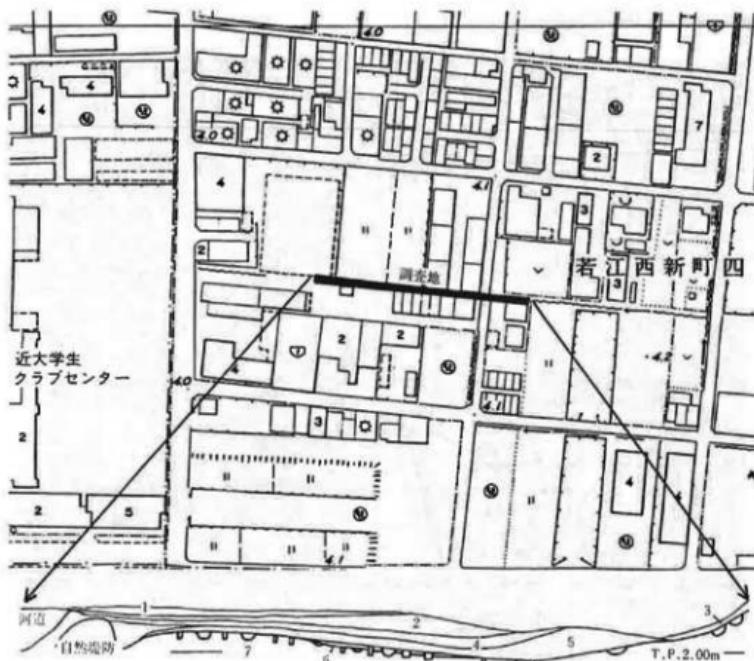
第1図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

2 調査概要

1) 基本層位

調査範囲は現在用水路として使用されており、用水路内に堆積したヘドロの厚さは約0.5mを測る。下層は大きく7層に分層が可能であった。各層毎に説明する。

- 第1層 暗緑灰色（10GY4/1）粘土質シルト、中～極粗粒砂を多量に含む。細礫少量。今回の調査範囲内では無遺物層であったが、第3次調査例から中世以降の堆積層であろう。
- 第2層 灰色（7.5Y4/1）粘土質シルト、極粗粒砂～細礫を多量に含む。
6世紀代の須恵器少量検出。造塼等は全く検出していない。
- 第3層 明黄橙色（10YR6/6）粘土質シルト、中粒砂～細礫を多量に含む。
調査範囲東端のみで検出した。極少量の遺物を検出したが、時期は不明である。
- 第4層 黄色（2.5Y7/8）極細～細粒砂混じり粘土質シルト。
無遺物層。



第2図 調査地点位置図(1/2,500)・基本層位図

- 第5層 西半部は黒色(10YR2/1)中粒砂が多量に混じるシルト質粘土、東半部は黒色(5Y2/1)シルト質粘土で、細粒砂を少量含む。
弥生時代後期の遺物包含層であり、西半部では有機質、炭化物が多く、遺物量も多くなる。東端では消滅する。
- 第6層 黒色(N2/0)シルト質粘土。調査範囲の中央のみ検出。
弥生時代後期の遺物包含層。遺物の出土量は微量である。下面で遺構面2を検出。上面は遺構面1となる。
- 第7層 暗緑灰色(10GY4/1)シルト～極細粒砂。弥生時代後期の遺構面となる。
以上が各層の概略であるが、東側に向けて高くなり、西端との比高は約35cmを測る。また、中央部で低くなり、第6層が薄く堆積する。第5・7層は西側で落ち込み、認められない。
第7層上面の遺構は、中央部第6層の堆積する範囲より西側では2時期の遺構面となる。
河道は第1層下面より検出した。南からほぼ北方向へ流れる。幅は約20mである。出土遺物は摩滅のはげしい細片が少量認められたが、時期は不明である。第1層の時期から中世期のものと推定できる。
河道の東側は、自然堤防の堆積が認められる。自然堤防内の堆積は、上部が細粒砂、中粒砂、粗粒砂の互層をなし、下部は灰色(5Y4/1)シルト、細粒砂、中粒砂の互層で、植物遺体のラミナが3層認められる。東側の部分は砂礫が多く、粒度の粗い堆積物が多くなる。
- 出土遺物は全く無く、自然堤防の形成時期は不明であるが、第2層が上部に堆積し、第5層包含層が下部にあること、また、周辺の調査で検出した層位関係から古墳時代前期頃と推定される。この自然堤防を形成した河道は調査範囲内で確認できなかった。さらに西側にあると考えられる。

2) 遺構

遺構面1

土壤3は第7層が西へ落ち込む肩部にあり、幅85cm、深さ20cmを測る。溝状の遺構となる可能性もあるが、明確ではない。遺物は多く、弥生時代後期後半であろう。

遺構面1の遺構は他に柱穴、土壤が認められるが、土壤3を除き、時期が把握できるものは無い。また、調査範囲の西半部のみに散在する。

遺構面2

溝2

幅152cm、深さ48cmを測る南北方向の溝である。西側より幅40cmの溝が交わる。底面は北側にわずかに低くなる。溝内の堆積は大きく2層に分かれ、下層が黒色(5Y2/1)粘土、上層が黒色(7.5Y2/1)混じり粘土である。

溝6

幅264～320cm、深さ40cmを測る断面皿状の溝である。形状から土壤の可能性がある。溝内の堆積は2層に分かれ、上層が黒色(5Y2/1)粘土質シルト、下層が黒色(7.5Y2/1)粘土であ

る。出土遺物は下層に集中している。

溝10

調査地東端で溝11とともに検出した。幅200~224cm、深さ33cmを測り、浅い椀状の断面を呈する。溝内の堆積は2層に分かれ、上層がオリーブ黒色(5Y3/1)シルト混じりシルト質粘土、下層が灰色(10Y4/1)細粒砂混じりシルト質粘土で、上層に遺物が集中する。溝の上部には灰オリーブ色(5Y5/2)炭混じりの粘土が薄く堆積する。

溝11

溝10の西側にあり、幅104cm、深さ40cmを測る。溝内には灰色(7.5Y4/1)砂質シルトが堆積し、遺物は検出していない。

井戸1

調査範囲のはば中央で検出した。直径232cm、深さ88cmを測る素掘りの井戸である。底部附近は、網龍状の植物纖維が認められ、底部に密着していることから、井戸掘削時に籠を底面に置き使用したと考えられる。植物纖維の上面には径2cm前後の枝木が少量認められ、籠を固定した可能性も考えられる。

柱穴群

今回の調査範囲内では柱穴、小土壙の大半が井戸1より西側に集中し、東側には殆ど認められない。

3) 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は弥生土器が大半で、古墳時代後期の須恵器、土師器片が少量である。中世期の遺物は、上層が用水路によって搅乱されていたために全く出土していない。ここでは、井戸1の資料を報告する。

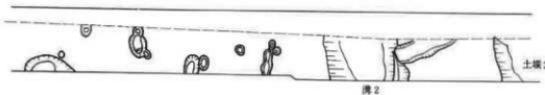
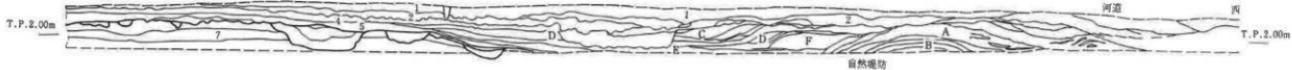
井戸1内出土の土器には甕、壺、鉢、瓶、高杯がある。甕1は、くの字に屈曲する口縁部からあまり肩の張らない胴部が続く。口縁端部は丸く終る。頸部から口縁部にかけて右上がりの粗いタタキがある。外面は横ナデのためタタキが消され、端部から内面は横ナデで調整する。胴部外面は下半1/3を強い右上がりのタタキ、以上を緩い右上がりのタタキを施す。内面は下半1/3を縱ハケ、以上を横ハケで調整する。色調はぶい黄褐色(10YR4/3)を呈し、胎土中に長石、石英を多く、雲母、角閃石を含む。口径16.0cm、器高21.3cm、底径4.8cmを測る。

甕3は甕1より大型で、口縁端部に面を持つ。胴部内面はナデ調整する。色調はぶい黄褐色(10YR5/3)を呈し、胎土中に長石、角閃石を多く、石英・雲母を含む。口径16.8cmを測る。

甕4は小型で、口縁端部はやや尖り気味に終る。胴部内面はナデ調整する。

甕2は緩く外反する口縁部から2段に立ち上がる壠部へ続く。壠部は丸く終る。口縁部は横ナデし、内面上半に細かい横ハケを施す。肩部外面は右下がりの粗いタタキを施し、下半を縱ハケで調整する。胴部内面にケズリを施す。色調はぶい黄褐色(10YR6/3)を呈し、胎土中に角閃石、長石、雲母を含む。口径16.4cmを測る。

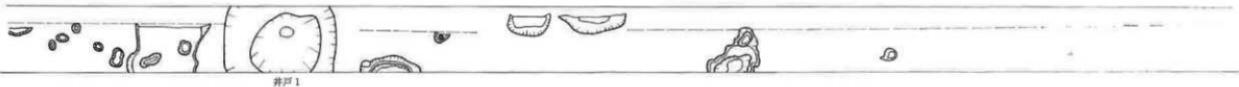
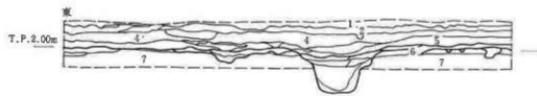
鉢は底部が八の字に広がる19と、細く終る18とがある。19は底部外面にユビオサエの痕跡が



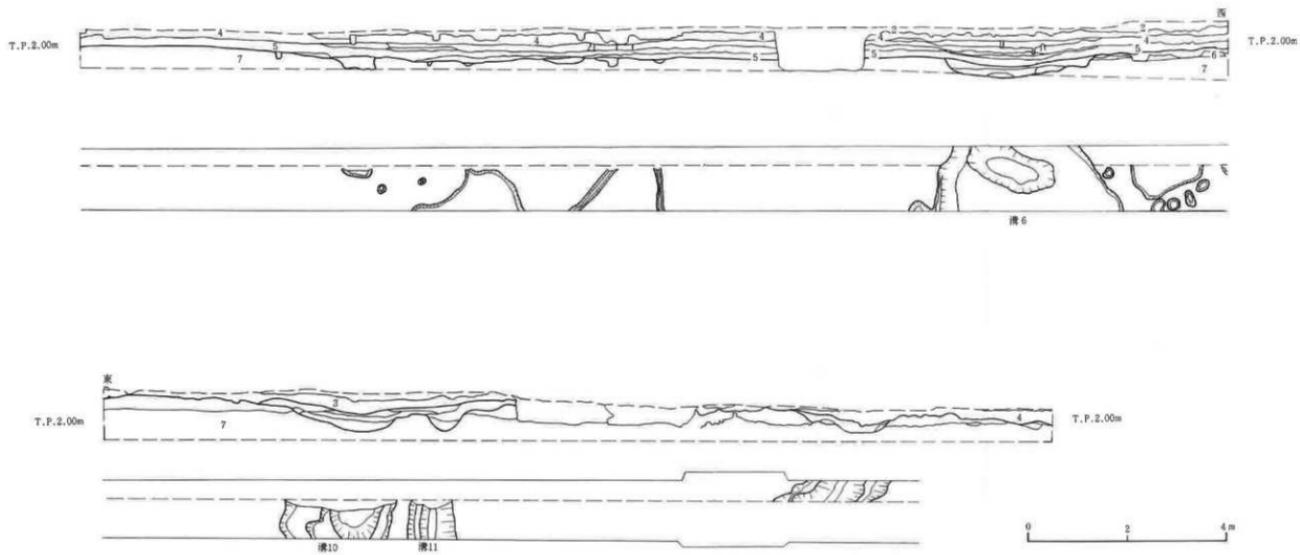
第1層 暗緑灰色(10GY4/1)粘土質シルト、中～極粗粒砂を多量に含む。細胞少々。
 第2層 黒色(7.5Y4/1)粘土質シルト、極粗粒砂～細胞を多量に含む。
 第4層 黄色(2.5Y7/8)棕褐色～細粒砂混じり粘土質シルト。無遺物層。
 第5層 西半部は黒色(10YR2/1)中粒砂が多量に混じるシルト質粘土、東半部は黒色
 (5 Y2/1)シルト質粘土で、細粒砂を少量含む。
 第6層 弥生時代後期の遺物を含む。西半部では有機質、炭化物が多く遺物量
 も多くなる。其層では消滅する。
 黒色(N 2/0)シルト質粘土。調査範囲の中央のみ検出。
 第7層 弥生時代後期の遺物を含む。下面で遺構面2を検出。上面は遺構面1となる。
 暗緑灰色(10GY4/1)シルト、極粗粒砂。弥生時代後期の遺構層となる。

自然堤防
 A層 細粒砂～粗粒砂の互層。
 B層 灰色(5 Y4/1)シルト、細～中粒砂、植物遺体の互層。極粗粒砂～細胞
 のラミナ有り。
 C層 中～粗粒砂。
 D層 中粒砂～細胞。
 E層 暗オリーブ灰色(2.5Gy3/1)シルト、シルト質粘土の互層。
 F層 粗粒砂～細胞の互層。
 河道 粗～極粗粒砂、細胞多量に混じる。上面は細～中粒砂。

0 2 4 m

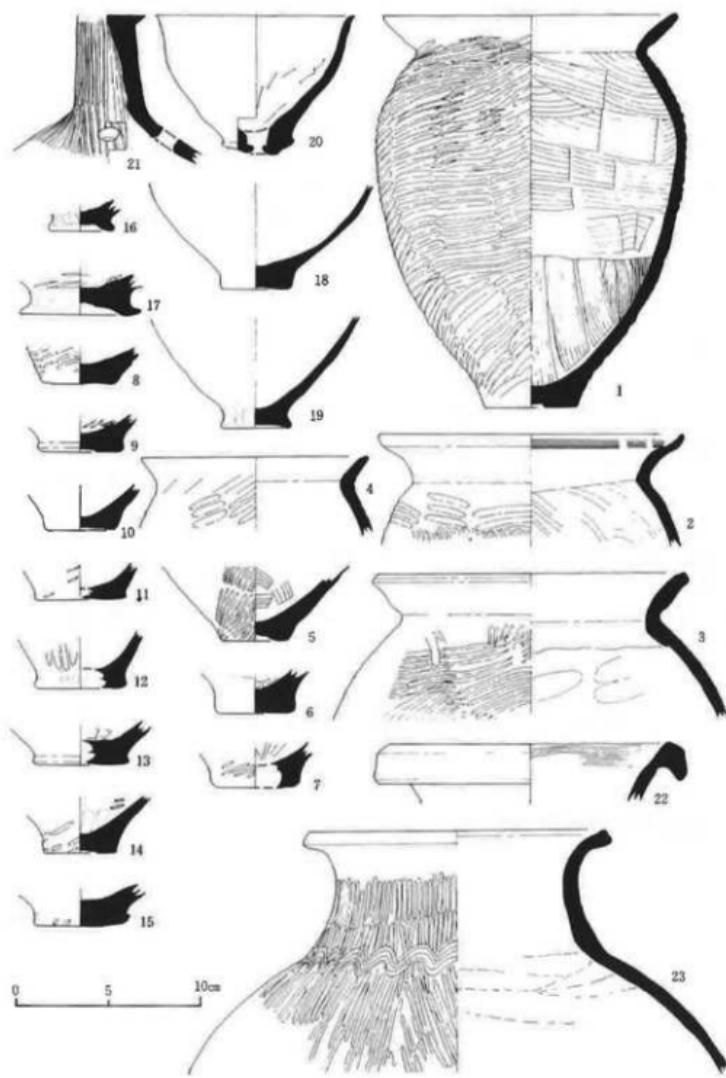


第3図 遺構平面図・断面図西半(1/80)



- 第2層 底色(7SY4/1)粘土質シルト、細粒粒砂を多量に含む。
 第3層 明黄橙色(10YR6/6)粘土質シルト、中粒砂・細砂を多量に含む。
 脊生時代中期のもので検出した。僅少量の遺物を検出したが、時期は不明である。
 第4層 黄色(2.5Y7/8)堆積—細粒砂泥じり粘土質シルト、無遺物層。
 第5層 西半部は黒色(10YR2/1)中粒砂が多量に混じるシルト質粘土、東半部は黒色
 (5Y2/1)シルト質粘土で、細粒砂を少量含む。
 脊生時代後期の遺物を含み、西半部では有機質、炭化物が多く、遺物量
 も多くなる。東部では消滅する。
 第6層 黒色(N2/0)シルト質粘土。開水範囲の中央のみ検出。
 脊生時代後期の遺物を含む層。下面で透視面2を検出。上面は透視面1となる。
 第7層 緑褐色(10GY4/1)シルト、粗粒粒砂。脊生時代後期の遺物層となる。

第4図 遺構平面図・断面図東半(1/80)



第5図 井戸1出土遺物実測図(1/3)

残る。体部は内外面ともナデ調整する。

壺20は内彎気味に広がる体部から、外反して尖る端部に続く。底部に穿孔する。口縁端部は横ナデ、体部外面はナデ、内面はハケ調整する。

壺22は外上方へひらく頸部から垂れ下がる口縁部を有する壺部は丸く終る。頸部内面上半に横ハケを施す。23は頸部に波状文を施す壺である。外面は頸部上半を横ナデ、下半及び脚部にミガキを施し、5条の柳描きの波状文を施す。色調は浅黄橙色(10YR8/3)を呈し、胎土中に粗い石英、長石、角閃石、雲母を含む。口径16.0cmを測る。高杯21は脚部から裾部にかけて外面にミガキを施す。3孔が裾部に巡る。脚部内面に絞り痕が残る。裾部はナデ調整する。

壺24(図版5)は土壙3出土である。

3まとめ

今回の調査は幅約1.3mと狭い範囲のものであったが、上小阪遺跡の立地を考えるうえで若干の知見が得られた。今回の調査範囲は東西に長く、東端と西端の遺構面の比高は約48cmを測り、西側が低くなっている。さらに西側は遺構面が落ち込み、低くなった部分に弥生時代以降の自然堤防が形成されている。この範囲は下層に粗い砂礫層が認められ、古い時期の河道の存在を推定させる。また東端の高まりは、東側に広がる自然堤防の影響のためであり、今回の調査範囲は弥生時代後期以前に形成された、自然堤防の間の後背湿地にあたる部分と考えられる。後背湿地の僅かな微高地に集落を形成したことが考えられる。

以降の分布については、中央部付近のもっとも低くなっている部分に井戸が築かれ、西側に柱穴が多く検出されたこと、東側は溝状遺構のみであったことから、自然の地形を最大限に利用していることがうかがわれる。

今回の調査に協力頂いた下記の諸氏に感謝する次第である。

今井喬子、金 弘美、丹野智之、今西直毅、井上靖啓、浜 裕子、大久畠由美子、
小川早月、竹中一美、上牧香陽、高橋秀典、榎本雅則、太田秀樹、立崎しおり、
吉竹輝美、鈴木 薫、常田 慶

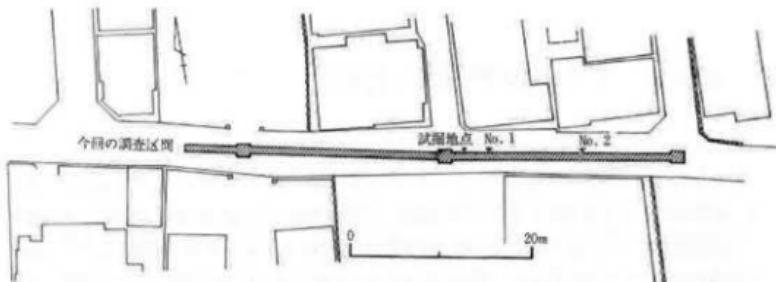
第3章 上六万寺遺跡第3次調査

1 はじめに

上六万寺遺跡は生駒山西麓の東大阪市上六万寺町一帯、標高25~35mを測る扇状地に所在する。昭和48年に文化住宅建設に伴う試掘調査によって遺跡の存在が知られ、ひき続いで実施された発掘調査によって弥生時代後期の土器多数と鎌倉時代の石積み井戸が検出された。⁽¹⁾この第1次調査で出土した弥生土器は、都出比呂志氏により畿内第V様式後半期の良好な資料として紹介され、上六万寺式の様式名称が与えられた。⁽²⁾これによって、上六万寺遺跡の名は考古学研究者に一躍周知されることとなったが、遺跡の規模や性格については小範囲の発掘であるために明らかにすることができなかった。その後、昭和55年に第1次調査地点の南東約150mにおいて住宅建設に伴う第2次発掘調査が実施された。⁽³⁾当時、この調査地点は東大阪市の周知する幸殿遺跡の範囲に含まれていたが、調査により検出された弥生時代後期の遺物包含層の状態は、上六万寺遺跡に連なるものと考えられた。そこで、この調査を契機として2遺跡を併せて上六万寺遺跡と呼称することとなった。以後、上六万寺遺跡における発掘調査は約11年間行なわれなかつたが、これは遺跡周辺の市街化がすでに進行していたためであつて、遺跡の破壊を伴う大規模な開発が行なわれなかつたことによる。いっぽう、東大阪市の推進する下水道事業は整備の遅れている東地区にもおよぶようになり、上六万寺遺跡においても遺跡内を東西に横断する下水道埋設工事が平成3年度事業として実施されることになった。そのため工事に先立って予定地の数箇所で試掘調査が行なわれ、遺構・遺物の有無が確かめられた結果、一地点より須恵器・土師器が検出されたことから、この地点を含む長さ約50m・幅1mの区間を対象とする第3次発掘調査が実施されることとなった。調査は1991年11月5日~同月15日に現場作業を実施した。



第6図 上六万寺遺跡位置図(1/25,000)



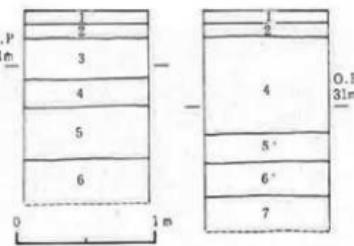
第7図 上六万寺遺跡第3次調査地位図(1/600)

2 調査結果

発掘調査を実施する区間は、第1次調査地の東約100mの道路上を起点とする長さ約50mの下水管管理部分である。標高はO.P.30m～32mを測る。発掘は機械により舗装及び盛土部分を除去した後、人力により堆積層内に含まれる遺物を採取し、併せて遺構の有無を調べながら工事最深部までを掘削した。

地層の状態は地点によってかなり違う。起点付近では、盛土の下に無遺物層が続き、地表下1m以下に2次的な堆積による弥生時代後期～古墳時代前期の土器を含む砂礫シルト層がみられる。このような地層は東へ約25m続く。地層の変化は、盛土の下にあらわれた。すなわち、5世紀末～6世紀初めの須恵器・土師器を多数含む黒褐色砂混り粘土質シルト層が検出され、その下に堆積する砂礫シルト層に含まれる弥生後期～古墳前期の土器も東へ行くにつれて増加する。そして、起点から約30mの試掘地点付近において、黒褐色砂混り粘土質シルト層は最も厚くなり、出土遺物量も最大となる。これより東は層厚がしだいに減少すると共に遺物量も再び減少する。また、5世紀末～6世紀初めに加えて奈良時代の土器も混るようになる。いっぽう、下層の砂礫層は試掘地点付近より暗青灰色シルト～粘土質シルトに漸移し、これに伴って弥生後期の土器が多数検出されるようになった。これらの弥生土器には磨滅が認められない。このような弥生時代後期の遺物包含層は約10mの間でみられ、起点より約40mの地点でほとんど遺物を含まない暗青灰色シルト層に変化する。

以上の結果から、今回の調査範囲において古墳時代と弥生時代の2時期の遺物包含層がそれぞれ限られた範囲に堆積していることが明らかとなった。細長いトレンチ調査の関係から遺構



1. アスファルト
2. 砂石
3. 地土
4. 関色(10YR4/4)粘土質シルト
5. 黒褐色(7.5YR3/2)シルト質粘土
6. 淡黄色(2.5Y7/4)シルト
- 5': 暗青灰色(10B/G3/1)シルト質粘土
- 6': 暗青灰色粘土質シルト
7. 暗青灰色シルト～細粒砂

第8図 地層断面図 左No.1地点・右No.2地点(1/40)

は検出されなかったが、これら 2 個の下面では近隣に住居跡などの遺構が存在するものと思われる。

3 出土遺物（第 9 図・第 10 図）

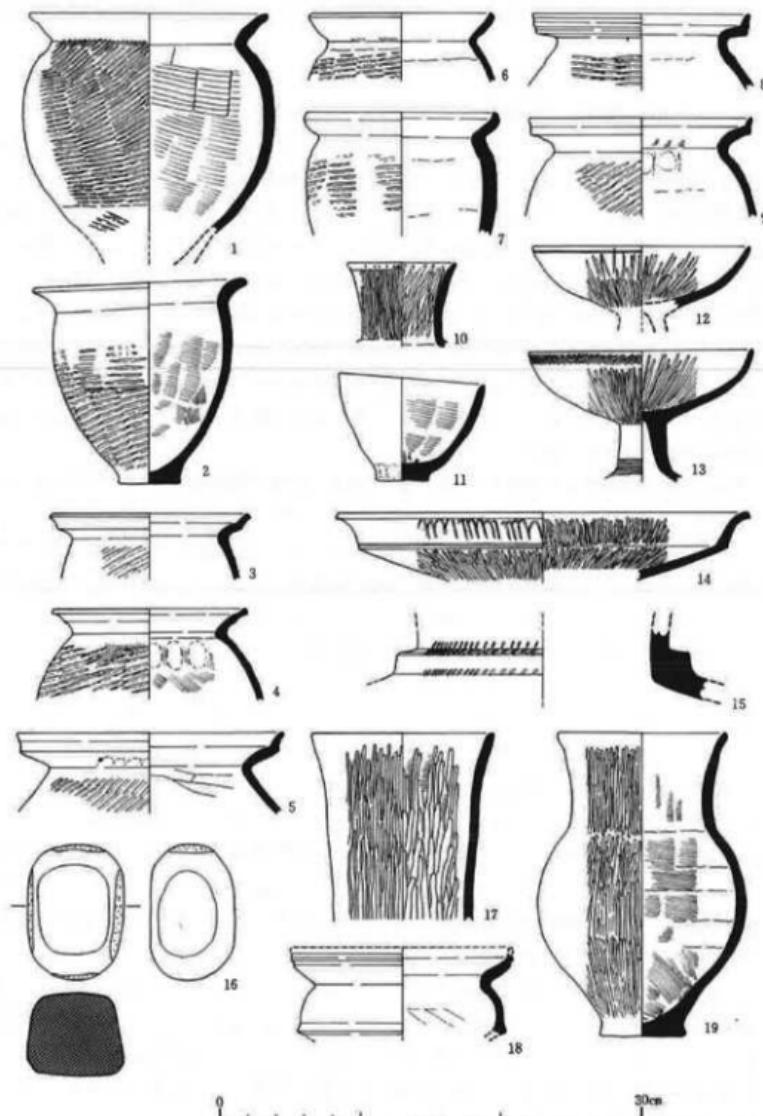
弥生時代・古墳時代・奈良時代の遺物が出土した。大部分が土器である。弥生時代の土器はいずれも畿内第 V 様式に属する。胎土は角閃石を含む生駒西麓産である。器種としては壺・甕・鉢・高杯がある。壺には長頸壺・短頸壺・広口壺がみられる。長頸壺 17 は、頭部の長い部類に属し、直口の口縁をもつ。内外面ともに丁寧なヘラミガキが行なわれている。短頸壺は、全体の器形が判る 19 と口頭部のみが出土した小型のもの 10 がある。19 は外面がヘラミガキ、内面がハケメにより調整されている。10 は口縁部外面に 1 条の沈線を施す。内外面とも丁寧なヘラミガキが行なわれている。広口壺 15 は大型の壺で頸部と胴部の境に凸帯を貼付けたものである。凸帯上およびその上下に合計 4 列の刺突列点紋が施されている。このほかに細片のため図示できないが、2 重口縁をもち口縁端部に竹管押捺紋、口縁部外面に櫛による手描きの波状紋をもつものが出土している。

甕はいずれも胴部外面にタタキメを残すものである。口縁端部が外反しておわる 1・2、口縁端部が内弯ざみにおわる 6・7、口縁端部をつまみ上げて受口状を呈する 3・5・8・9 などに細分される。このうち 8 は、受口状の口縁部外面に 2 条の凹線紋を施し、胴部のタタキメは水平ないしは左上りに施されている。他の受口状口縁をもつ甕よりも明らかに古い特徴をもつものである。外反口縁の甕のうち小型の 2 は、胴部上半のタタキメの上にハケメを加えている。中型の 1 は胴部の張りが大きく、タタキメは器体の上位から中位にかけていっしきに叩いたような連続性をもつ。内弯口縁をもつ 7 は粗雑な作りである。出土した甕のタタキメは、3 が最も太筋で（2 本/cm）、他は中位の太さ（2.5 本 - 3 本/cm）であり、内面調整はハケメ、ユビオサエナナデなどが行なわれている。

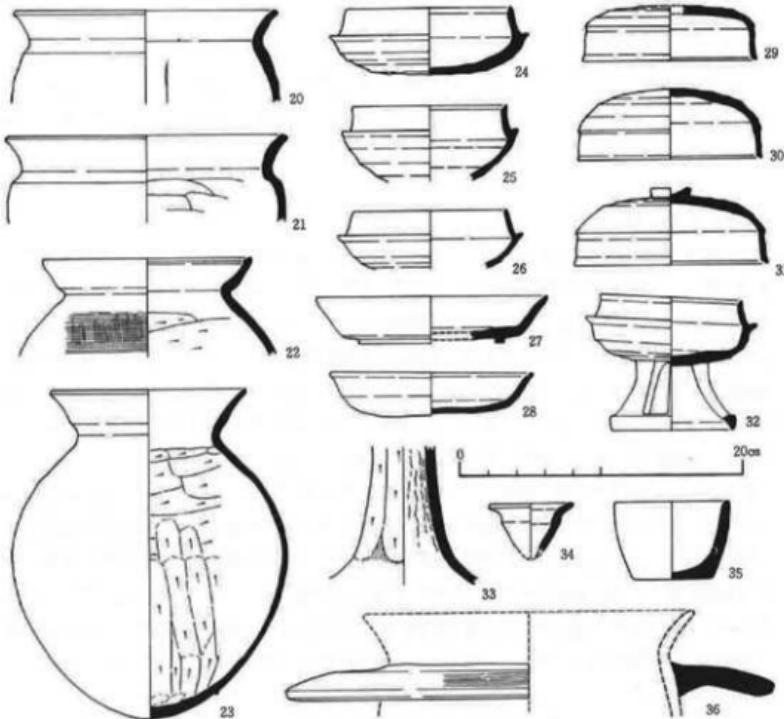
鉢 11 は小型壺の下半部と共通する器形を呈する。外面はユビオサエナナデにより調整するが、壺では行なわれるヘラミガキは省かれている。内面はヨコハケメ。鉢 18 は口縁端部を欠くために手焙形土器の可能性もあるが、受口状口縁に 2 条の凹線紋を施すという古い要素より鉢とみるのが適當かと思われる。体部は器体中位に膨らみをもち、最大径部に凸帯をもつ。凸帯は貼付けではなく、器体の接合部にはみ出した粘土をヨコナナデして断面三角形に整えたもので、接合部の補強目的に装飾性を加味したものとみられる。

高杯は口縁部が外反する 14 と柄状杯部をもつ 12・13 がある。14 は外反する杯口縁部に暗紋により波状を描き、杯体部との境に 1 条の沈線を施す。内外面とも丁寧なヘラミガキが行なわれている。12・13 は同じ器形で 13 には脚柱の短い脚部がつく。12 の口縁部外面に 1 条の沈線、13 の口縁部外面に回転台使用による櫛描き波状紋、脚部に 5 条の平行沈線紋が施されている。共に内外面を丁寧なヘラミガキにより仕上げたものである。

土器の他に磨石 16 が 1 点出土した。権大の円礫を利用したもので周縁は使用により表面が滑



第9図 弥生土器・磨石実測図(1/4)



第10図 土師器・須恵器実測図(1/4)

らかに磨り減っている。盛土内に2次堆積したものであるために、使用時期を決定することは難しい。

古墳時代の遺物としては4世紀の古式土師器壺22・23、5世紀末～6世紀初めの須恵器蓋杯24～26・29・30、有蓋高杯31・32・38、土師器羽釜36、鉢35などがあげられ、奈良時代の遺物としては土師器壺20・21、杯28、高杯33、ミニチュアの壺34、須恵器杯27などがあげられる。22は口縁端部内面が肥厚し、胴部内面をヘラケズリした布留式の壺。23は口縁端部を若干つまみ上げ、胴部器壁を薄くヘラケズリする特徴より庄内式終末期の壺とみられる。須恵器蓋杯と有蓋高杯は全体の器形、たち上がりや口縁部の特徴、外面の回転ヘラケズリの範囲と方向、内底面のナデ調整の有無などの要素を勘案して、24・26・29・31・32がTK208型式、25・30がTK23型式に属するとみられる。土師器羽釜は鉢が幅広でかつ中途から若干下方に折れ曲がる特徴より、繩手遺構出土品と同様の器形と思われる。⁽⁴⁾長胴型の羽釜としては最古型式に属するものである。鉢は平坦面の広い平底をもつ特異な例である。羽釜と鉢の胎土は生駒西麓産。須恵器と土師器の杯27・28は共に奈良時代に通有の型式。高杯33も脚柱を八角形にヘラケズリさ

れた奈良時代特有のものである。ミニチュアの壺34は、壺・瓶と共にミニチュア3点セットと呼ばれる祭祀遺物の1つである。この種のものは古墳時代後期～奈良時代に出土例が知られているが、今回の出土品は口縁と瓶の境を強くヨコナギする特徴から奈良時代のものと考えられる。⁽¹⁾

4 まとめにかえて

上六万寺遺跡の第3次調査は、幅1mの割約された範囲で行なわれたために、遺構検出よりも遺物包含層の拡がりや堆積状態を主とするものとなった。その結果、従来より知られていた弥生時代後期の遺物包含層の上に新たに古墳時代～奈良時代の遺物包含層の拡がりを確認し、多数の遺物を検出した。そのなかには、最古式の長胴型羽釜やミニチュアの壺など注目される遺物も含まれている。また、盛土内に2次堆積したものであるが、凝灰岩の組合せ式石棺の破片かとみられる石材も出土した。地元の人によれば、昭和30年代まで近隣に「丸山」と呼ばれた小山が存在したとされ、古墳であった可能性も考えられる。

いっぽう、弥生時代の出土遺物については、従来知られている上六万寺式よりも古い時期の土器が出土した。受口状口縁に凹線紋を施した壺は、明らかに第V様式初めの西之辻I地点式の特徴をもつ。頭の長い直口の長頸壺、杯口縁部に回転台利用の櫛接波状紋を施した高杯、同じく暗紋により波状紋を描く高杯なども第V様式の古い時期のものと考えられる。これらを含む今回出土の弥生土器は、おそらく第V様式の前半を中心とするものであろう。上六万寺遺跡の範囲内には、第V様式のなかで時期差をもつ土器が互いに地点を異にして分布していると考えられるのである。

* 上六万寺遺跡の発掘・整理参加者は次のとおり。美並慶久、柳瀬久美子、宮澤優子
註)

- (1) 福永信雄 「上六万寺遺跡」(『東大阪市遺構保護調査会年報Ⅰ』 1975)
- (2) 都出比呂志 「古墳出現前夜の集団関係」(『考古学研究』80号 1974)
- (3) 藤田邦夫 「幸殿遺跡」(『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要』198年度)
- (4) 萩田昭次 「古墳時代『(河内四条史』1977) P207の1
- (5) 水走遺跡において類似がセットで出土している。「発掘20年のあゆみー市制20周年特別展示ー」
(東大阪市教育委員会・財團法人東大阪市文化財協会 1987) P.44
- (6) 幸本隆裕 「鬼塚遺跡Ⅱ・若江遺跡」(東大阪市教育委員会 1979) P31-P34

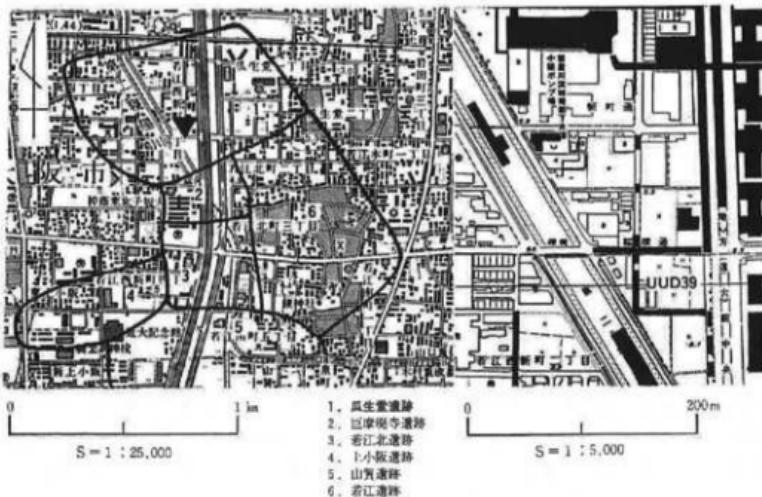
第4章 瓜生堂遺跡第39次調査（その1）

1 はじめに

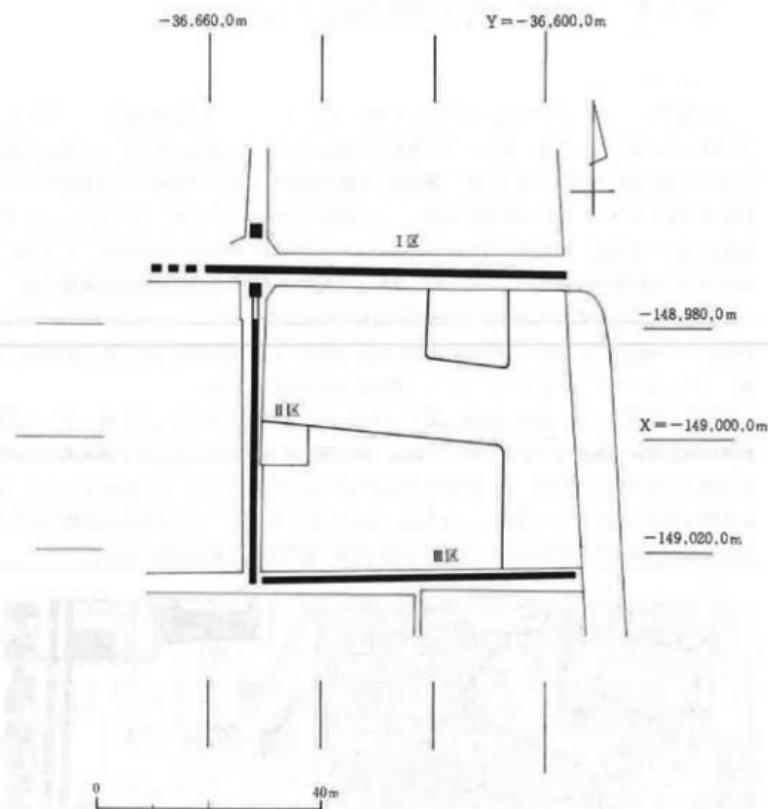
瓜生堂遺跡は河内平野中央部に位置し、弥生時代から連続とつづく複合遺跡で、特に弥生時代中期の大集落として有名である。その遺構は現地表下約4mの堆積におおわれ、今回の調査ではこの遺構には到達しなかった。遺跡は、楠根川などによって形成された自然堤防上の微高地に立地している。現在の標高はT.P.+4.5m前後を測り、近年市内で見うけられるように田園地帯から市街地への変貌が著しい。周辺には、近畿自動車道建設に伴う調査で大きな成果をあげている巨摩廢寺遺跡や、中世の若江城跡を含む複合遺跡である若江遺跡が隣接する。

調査地は東大阪市若江西新町2丁目地内の市道と農道および用水路で、総長約180mである。幅約1.6mの開削工事であり、現地表下約2mまで調査した。現場調査は中断を含め1991（平成3）年8月23日から10月17日まで行い、調査面積は約288m²である。

調査区を便宜的にI~III区にわけ、以下に地区ごとに成果を述べることとする。ただし遺物整理作業が現在も継続中であるため、今回は一部の概要のみを報告する。なお遺構実測の基準には国土座標第VI系を使用した。図中の方位は特に表記のないかぎり、国土座標北を示す。測量作業は株式会社バスコに委託し、水準高にはT.P.値を用いた。また土色名は農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に準じた。



第11図 調査地位置図



第12図 調査区位置図 (1/1,000)

2 調査概要

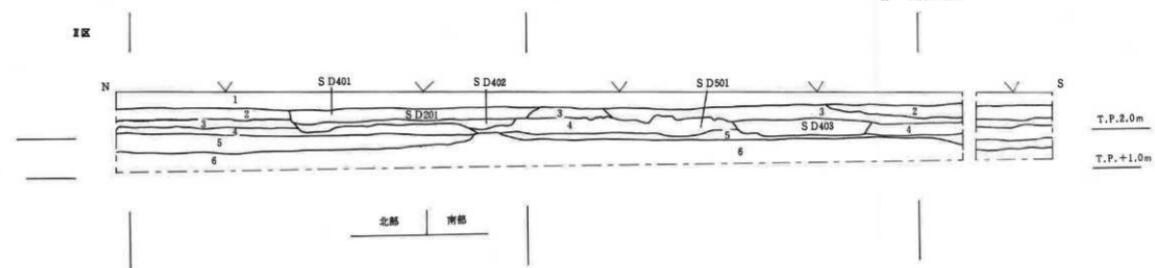
1) I区

本地区は桜橋通りと呼ばれる東西道路で、西は第二寝屋川、東は大阪中央環状線までの区間である。交通量の多い市道上であるため、通行を遮断することができず夜間工事に立会、土層観察を行った。西半は第二寝屋川の堤防に伴う盛土内に工事はとどまったが、東半では層厚約70cmの土師器細片を含む包含層を確認した。当初、本層を旧耕土層と判断し重機によって掘削した。夜間調査とはいえ精査を怠ったことは残念である。層序は後述のII区と同一であろう。

X = -149,000.0m

X = -149,010.0m

X = -149,020.0m



Y = -36,600.0m

Y = -36,610.0m

Y = -36,620.0m

II区東部

T.P. +2.0m

T.P. +1.0m



第13図 調査区土層図(1/100)

2) II 区

本調査区は桜橋通り上の第38次調査仮称第1ピットに接続するものである。南北の農道で、南端にはⅢ区とした用水路が東西に流れている。調査は軽量鋼矢板を打設し、近年の盛土を重機によって除去した後、人力によって遺物包含層各層を掘削した。SD201をさかいで北部と南部では層序が異なり、南部の層序はⅢ区とはほぼ同様である。⁽¹⁾

北部層序

第1層 盛土、旧耕土、床土

第2層 明黄褐色～茶褐色砂混砂質シルト層。粘土ブロックが混在し、整地層と考えられる。

$X = -149,000.0m$

$Y = -36,645.0m$

上面は南部第3層とともに遺構面をなし、SD201を検出した。

第3層 明赤褐色～灰褐色砂混砂質シルト層。北端部では須恵器がまとまって出土した。

第4層 灰褐色シルト質細砂層。須恵器等を含む包含層である。上面で遺構を検出している。

第5層 黄褐色細砂～砂礫層。ラミナが顕著に観察され、流水による堆積と考えられる。弥生時代後期から古墳時代前期の土器が出土した。

第6層 青灰色粘土層～細砂層。青灰色シルト、灰色細砂、暗青灰色粘土など数層に分層される。一部に植物遺体を含む。大阪文化財センターの調査では本層上面あるいは層中で庄内期水田面を検出しているが、本調査では遺構を検出することができなかつた。

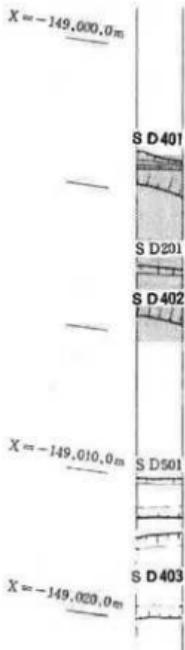
南部層序

第1層 盛土、旧耕土、床土

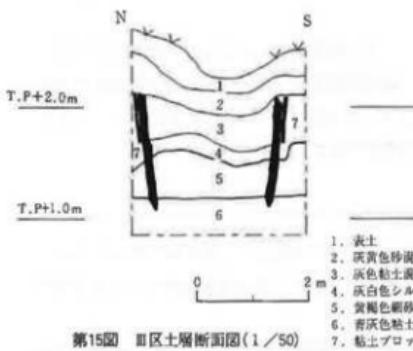
第2層 赤褐色～黄褐色砂混粘質シルト層。瓦器等を含む包含層である。II区南端付近とⅢ区にみられる。

第3層 黄灰色～灰褐色砂混砂質シルト～粘質シルト層。天目茶碗等を含む包含層。数層に細分されるが、ひとつつの層位とした。SD201以南に分布し、上面は北部の第2層とともに遺構面をなす。

第4層 橙色～灰褐色シルト～中粒砂層。瓦器、埴輪を含む包含層である。変質、変色が著しく明瞭に分層される個所も多いが、層界に遺構が認められず、ひとつの層とした。上面は遺構面を形成し東西方向の溝を検出した。



第14図 II区南部平面図(1/200)



第5層 黄褐色細砂～砂礫層。北部

の5層と同一層。層厚約5cm

に薄くなる部分がみられる。

溝状にくぼむ部分を S D 501

としたが、遺構とはいひ難い。

第6層 青灰色粘土～細砂層。北部

の6層と同一層。

遺構

北端部では第3層から古墳時代の

須恵器がまとまって出土した。ほほ

完形の壺、いわゆるこね鉢、子持ち壺、壊蓋等がある。須恵器以外の遺

物は土師器小片が少量出土したのみである。

南部では4層上面で東西方向の溝を3条検出した。耕作に伴うものと考えられる。2層上面で検出した S D 201も耕作に伴うものと思われ、鳥煙の一部である可能性が高い。

3) III区

本地区は調査直前まで使用されていた深さ約30cmの用水路であった。この水路は東から西に流れ、第二寝屋川へ注いでいる。当初、本来の深さが1m程度のものであろうと考えていたが、鋼矢板打設後の重機掘削中に予想外に深いものと判明した。第5層の砂層まで擾乱され、水路底は現地表下約1.3mを測る。水路は杭を約1m間隔に打ち込み、長さ約2m、幅約35cmの板を2段、土留めに使うしっかりとしたものであった。調査区全体に、ちょうど水路の掘方がトレンチ内に納まり、ほかの遺構は平面的に検出できなかった。水路埋土中からは現代陶磁器、円筒埴輪、土師器が出土した。西端から東へ約25m分については軽量鋼矢板の打設前に土層観察を行い、ピット状遺構2、溝状遺構1を確認した。

なお本地区西の中央環状線歩道上では上水道管敷設に伴う調査が行われている。⁽¹²⁾

3 おわりに

今回の調査では瓜生堂遺跡を著名なものとしている弥生時代中期の包含層、遺構面には至らなかった。しかし、上層部の須恵器、埴輪などを含む包含層について資料を得ることができた。整理作業が完了のため今回は一部の遺構と層位の提示にとどめ、詳細は来年度に報告をしたい。

末尾ではあるが、今回の調査にあたっては今西直毅、小川早月、大久保由美子、立崎しおり、常田慈、丹野智之（五十音順）の参加を得た。記して謝意を表したい。

註

(1) 未報告。近く報告書が刊行される予定である。

(2) 『上小阪・瓜生堂・新家遺跡調査報告書』 東大阪市遺跡保護調査会 1976

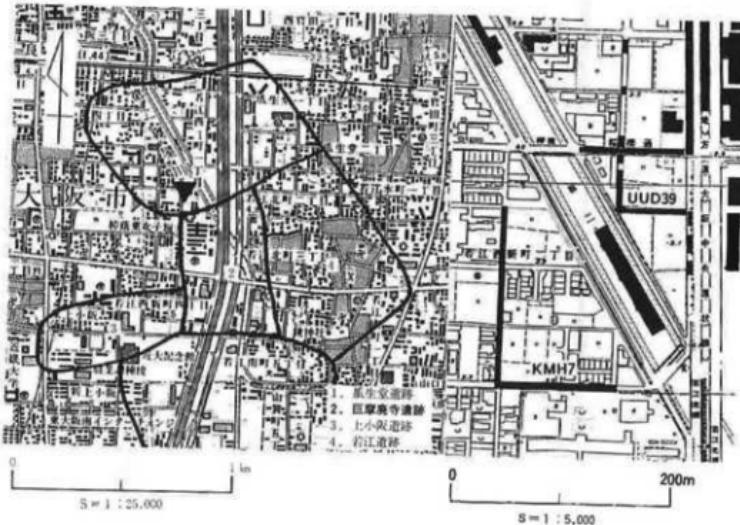
第5章 巨摩廃寺遺跡第7次調査

1はじめに

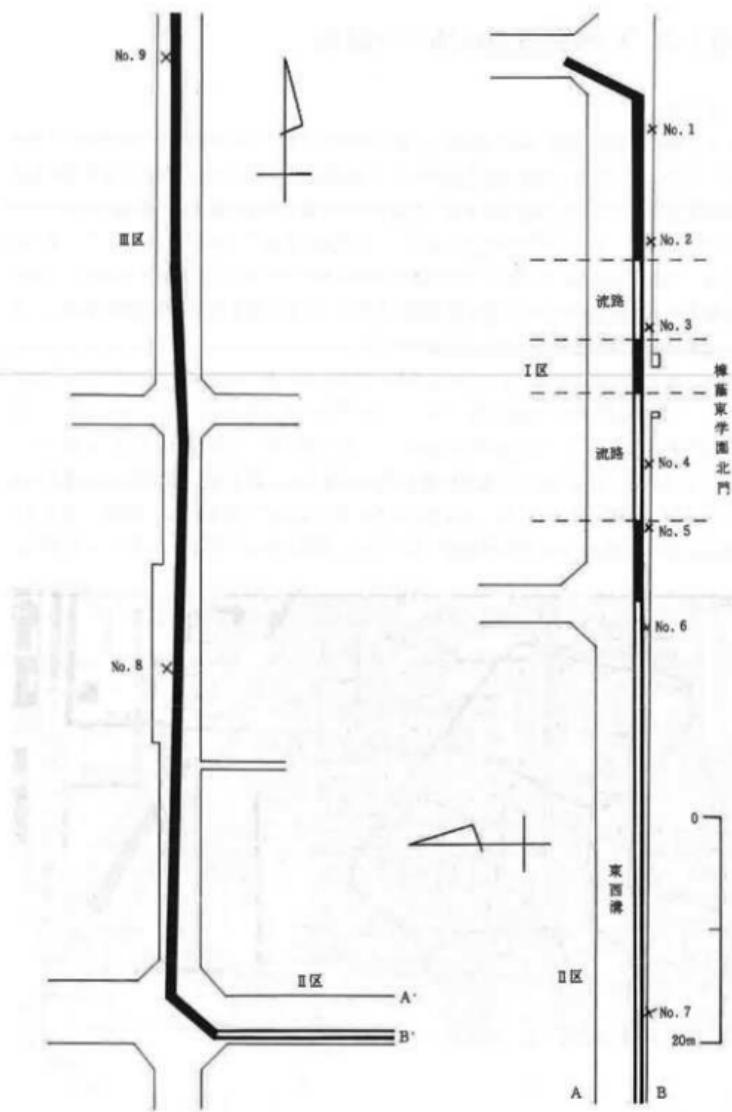
巨摩廃寺遺跡は河内平野中央部に位置し、旧大和川の支流である長瀬川などが形成した自然堤防上に成り立っている。現在の地表面はT.P.+4m前後を測り、田畠・住宅・工場等の混在する市街地となっている。遺跡中央を府道大阪中央環状線・近畿自動車道が南北に縦断しており、その事前調査によって弥生時代から近世の複合遺跡であることが明らかとなった。本遺跡の北には、弥生時代中期の大規模な方形周溝墓が発見されたことで有名な瓜生堂遺跡が、南には弥生時代の水田跡が検出された若江北遺跡が隣接している。弥生から古墳時代にかけて、これらの遺跡は密接な関連をもっていたと思われる。

調査地は東大阪市若江西新町2丁目のL字形の道路上で、東西約113m、南北約175m、総面積約288m²である。幅約80cmの開削工事であり、水道管等の地下埋設物がすでに埋められているため、現地表下約1.5mまで立会調査を実施することとなった。現場調査は1991（平成3）年5月13日から8月7日まで行い、調査面積は約230m²である。調査地の北部は瓜生堂遺跡の範囲にはいるが、後述のようにさしたる成果はみられず、今回は巨摩廃寺遺跡の名称で報告する。

調査は下水管渠埋設のための重機掘削に立ち会い、柱状土層図を作成したほか、平板測量に



第16回 調査地位図



第17図 調査区平面図 ($S = 1/500$)

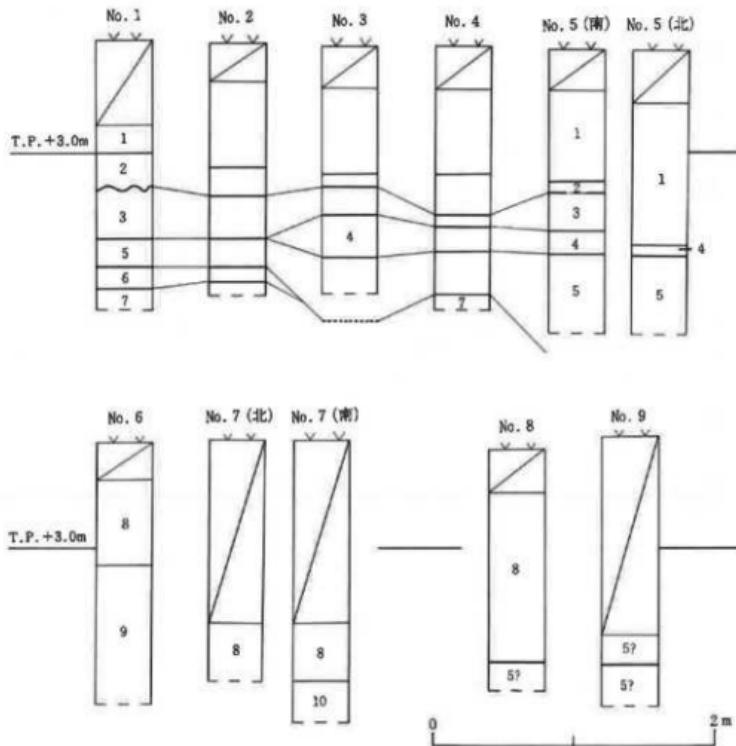
よる平面略測図を作成した。その結果、溝1、流路2の遺構のほか、若干の遺物の出土をみた。L字形の調査区のうち樟蔭東学園北の東西道路東半をI区、西半をII区、南北道路をIII区と便宜的に呼称し、以下順次述べることとする。

なお、水準高にはT.P.値を用い、図中の方位はおおまかな国土座標北を示す。土色については『農林水産省農林水産省技術会議事務局監修 新版標準土色帖1990年度版』を参考とした。

2 調査概要

1) I区

本調査区は水道管等の埋設物が存在し、平面的には遺構を確認できず、断面観察を行った。5地点付近の北壁は第1層の層厚が約1mあり、なんらかの遺構と思われる。3地点、5地点



第18図 土層柱状図(S = 1/40)

付近では第5層が厚く、南北方向の流路が2本存在すると考えられる。以下に層序を述べる。

第1層 茶褐色砂混粘質シルト。本層の上面は現水田面と一致し、調査区の道路上面より約60cm低い。旧耕土層と考えられる。土師器鱗片が出土し、堆積時期は中世から近代と思われる。一部ではより細かな分層が可能である。5地点では落ち込みが存在し、下面は造構面を形成していると思われる。

第2層 青灰色シルト。上部は褐色の変色がみられ、旧床土層と考えられる。

第3層 灰色砂層。細砂～中粒砂の比較的しまった砂層である。遺物は出土しなかった。下には造構面を形成していると考えられる。流路もしくは洪水による堆積層と考えられる。

第4層 暗褐色砂混粘質シルト。粘性が強く、3地点では弥生もしくは古墳時代前期の土器が出土した。器面調整を確認できず、復原も不可能で、國化しえなかった。本層は3地点付近から西にみられ、東部では検出していない。

第5層 灰色砂層。一部では上部にシルト層が堆積している個所もみられた。第3層同様下面は造構面と考えられる。流路もしくは洪水による堆積層と考えられる。3地点と5地点には厚く堆積し、流路が存在すると思われる。

第6層 暗青灰色砂混シルト。2地点付近から第7層との境界が不明瞭となり以西ではなくなる。第7層の変質した部分であろうか。

第7層 黒褐色粘質シルト。4地点付近の上面は固くしまり、明瞭に造構面を形成する。

2) II区

本調査区では第1層に相当すると思われる赤褐色砂混粘質シルト（第8層）が堆積し、第2層以下の各層は確認できなかった。6地点付近はコンクリート製の暗渠があり、青灰色砂混シルト層（第9層）とともに最近の再堆積と考えられる。7地点以東では第8層中で東西方向の溝を長さ約57mにわたり検出した。青灰色粘土（第10層）で埋まり幅40cm以上、深さ30cm以上を測る。現在の地割に沿うことから耕作に伴う用水路と思われる。遺物は出土していないが、第8層から中世と思われる平瓦片が出土しており、この溝も中世のものと考えられる。

3) III区

本調査区は擾乱が激しく、II区で観察された第8層が第8地点に部分的に残るほか、植物遺体を含む灰色中粒砂層が堆積していた。レベルから第5層に相当すると思われる。

3 おわりに

I区の弥生から古墳時代の包含層は樟蔭東学園西部の5地点付近でとぎれ、本遺跡の西限はこの4地点付近と思われる。遺跡端部の様相は擾乱されているため、不明である。II区、III区は、別に述べる瓜生堂遺跡第39次調査の層序に近似するようである。このことから、巨摩庵寺遺跡よりも瓜生堂遺跡の範囲と考えたい。

末尾ではあるが、調査にあたっては太田裕樹、丹野智之、前田秀則（五十音順）の参加を、実測図の作成には吉竹輝美の助力を得た。記して謝意を表したい。

第6章 若江遺跡第45-1次調査（その2・出土瓦類）

1 はじめに

90年度に実施した若江遺跡第45-1次発掘調査では若江城の掘を検出し、小面積にもかかわらず、多量の遺物が出土した。遺構と出土土器については前年度に概要報告を刊行しているが、⁽¹⁾瓦類は未報告であった。今回、整理作業が終了したため、本書に報告するものである。

壙から出土した遺物には弥生から室町時代までのものが混在し、瓦についても同様に、飛鳥から室町時代のものがある。資料のほとんどは破片であるが、あえて丸瓦や平瓦も掲載した。

2 瓦類

1は巴文軒丸瓦である。ほぼ完形に復原できた。全体に摩耗が著しい。右廻りの三巴文を内区に配し、外区は26個の珠文をめぐらす。瓦当径は約14.5cm、周縁は幅約1.5cm、高約1.1cm、内区の径は約8.1cmを測る。丸瓦部凸面はなでによって平滑に仕上げ、瓦当部にちかい前部に縱方向のへらなでがみられる。凹面は緩やかな弧線をかくいわゆるコビキ跡がのこる。糸引きと考えられる。瓦当の裏側に深さ約2.8cmの打ち欠きが両縁にあり、玉縁に径約1.2cmの釘穴がみられる。全長約33.2cmを測る。摩耗のためか胎土は粗く、灰色を呈する。瓦当面の黒色化はみられず、離れ砂の痕跡がのこる。

2は巴文軒丸瓦である。左廻りの三巴文を内区に配し、外区は16個の珠文をめぐらすと思われる。瓦当径は約15.2cm、周縁は幅約1.8cm、高約1.0cm、内区の径は約8.7cmを測る。丸瓦部凸面は縄叩き後なでをほどこし、凹面は布目をのこす。径約1.2cmの釘穴がみられる。黒灰色を呈す。

3は巴文軒丸瓦である。右廻りの三巴文を内区に配し、外区は28個の珠文をめぐらすと思われる。瓦当径は約15.4cm、周縁は幅約2.6cm、高約1.0cm、内区の径は約7.5cmを測る。丸瓦部凸面はへらけぎりによって、平滑に仕上げる。凹面は糸引きと考えられる緩やかな弧線のコビキ跡がのこる。青黒色を呈し、3点の軒丸瓦のうち、もっとも堅い印象を受ける。

4は連珠文軒平瓦である。瓦当幅は約3.3cm、周縁は幅約0.7cm、高約0.6cm、を測る。平瓦部はごく一部が遺存する。凸面は工具によってなで、凹面は離れ砂がみられる。黒灰色を呈する。

5は鬼瓦の一部と思われる。円形文は径約2.5cmを測る。外内面ともにへらみがきを施す。青黒色を呈し、胎土は精良である。

6、7は軒瓦小片である。瓦当文様は明らかではない。6は瓦当幅約4.2cmを測り、黒灰色を呈する。7は複弁か単弁かは不明である。焼成は須恵質である。

8は平瓦と思われるが、隅がへらきりされ、隅瓦とも考えられる。凸面には縄叩きが、凹面には布目がのこる。凹面端部は工具によるなでを施す。凸面に糸の圧痕らしきものがみられる

ことから、いわゆる一枚作りによるものと考えられる。灰白色を呈し、胎土は精良である。

9は8よりも隅のへらきりが明瞭で、たいらかであるため隅駁斗瓦と思われる。凸面は繩叩き後へらによるなでを施し、凹面には縦方向のへらなでがみられる。青灰色を呈し、厚約2.2cmを測る。胎土はやや粗い。

10、11は凸面に格子目叩き、凹面に布目がのこる平瓦である。11は叩きをなで消しているようである。黒灰色を呈し、10は青灰色で須恵質焼成である。

12は平瓦である。両面に径1mm以下の離れ砂がみられ、一部に工具によるなで痕が見られる。径約0.7cmの小孔がある。黄褐色を呈する。

13は摩耗の著しい瓦で凸面の調整は不明である。凹面に布目がのこり、糸の結び目状の圧痕がみられる。小片のため平瓦か丸瓦か判別できない。

14から16は平瓦である。14は凸面をへらみがきで平滑に仕上げ、凹面は布目痕とコビキ状の縦やかな弧線が観察される。黒色化が顕著である。15の凸面は繩目と指頭圧痕が明瞭で、離れ砂をほどこす。凹面には布目がのこり黒灰色を呈する。16の凸面は繩目が顕著で、凹面は布目痕とコビキ状の縦やかな弧線が観察される。暗青灰色を呈し、須恵質焼成である。

17は丸瓦である。凸面は繩叩き後へらによって平滑に仕上げる。凹面は布目がのこる。黒灰色を呈し、焼成は堅い印象を受ける。

3 おわりに

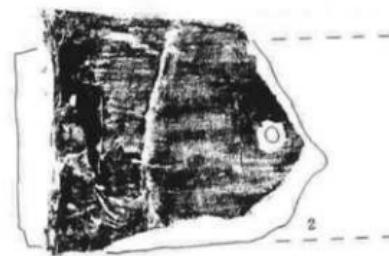
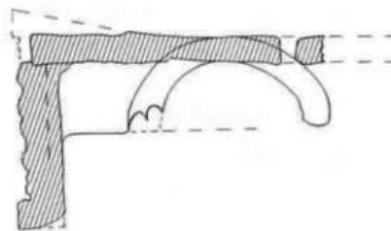
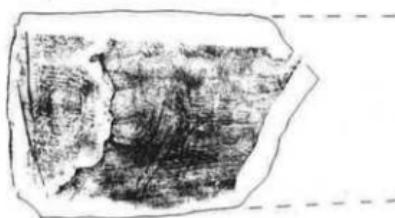
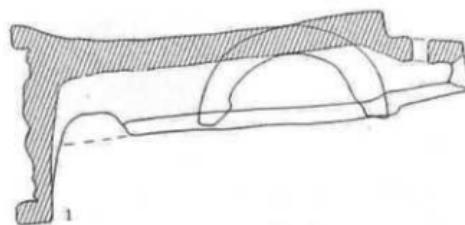
若江城は14世紀末に築城され、1581（天正9）年には城はなかったとされている。中世末期の城郭遺跡としては、大阪城の前段階で、羽曳野市の高屋城と同時期に位置する。古代の推定若江寺、推定若江郡衙や中世の集落が存在した地に築かれており、その遺構から出土する遺物は弥生から室町時代にかけてのものが混在する。このため良好な一括遺物の検出は少ないが、個々の検討を行うことにより、若江城における中世末期の遺物の様相を明らかにすることができよう。

註

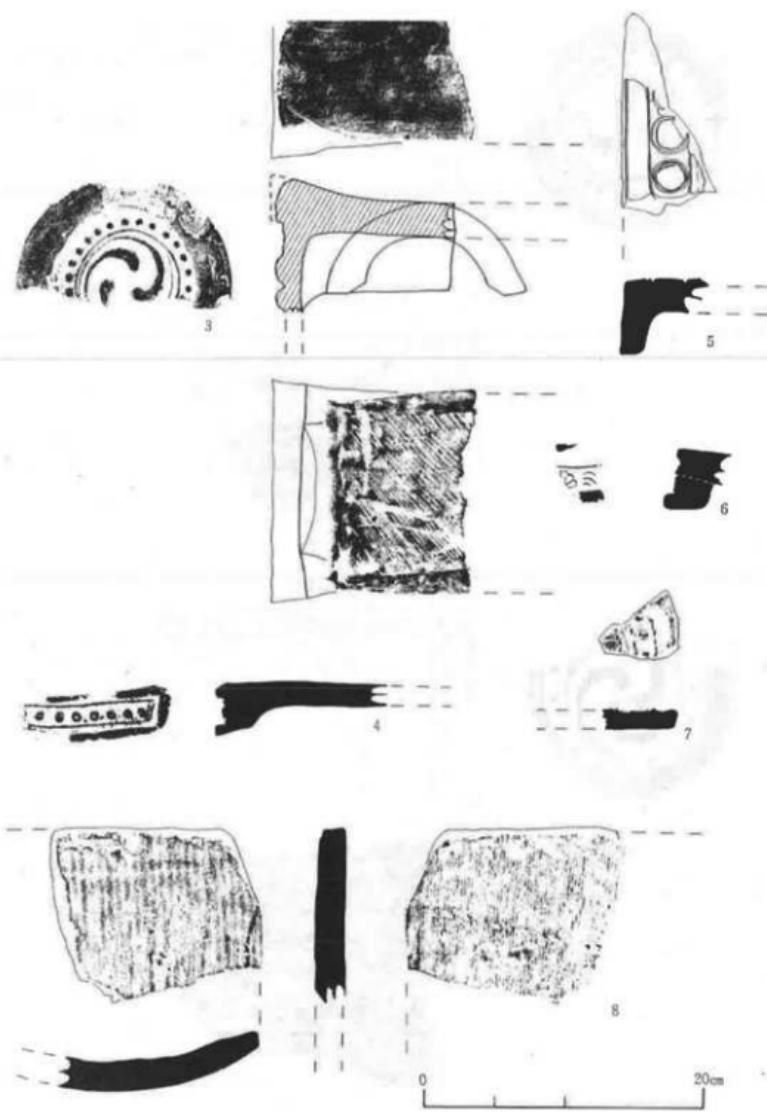
- (1) 『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告－1990年度－』 財團法人東大阪市文化財協会
1991

調査概要などは本書を参照されたい。瓦類のほか木製品も若干出土しているが、これについては改めて報告の機会を持ちたい。資料の分散を御容赦願いたい。

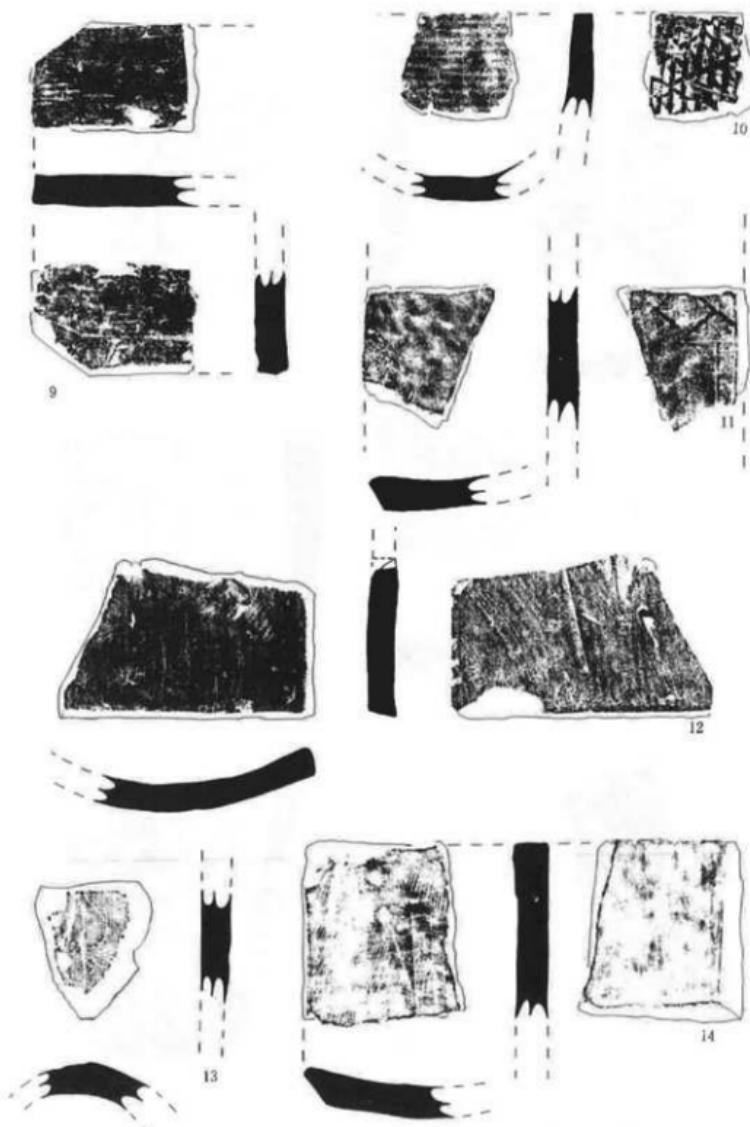
- (2) 『抵津高櫛城本丸跡発掘調査報告書 高櫛市文化財調査報告 第14回』 高櫛市教育委員会
1984



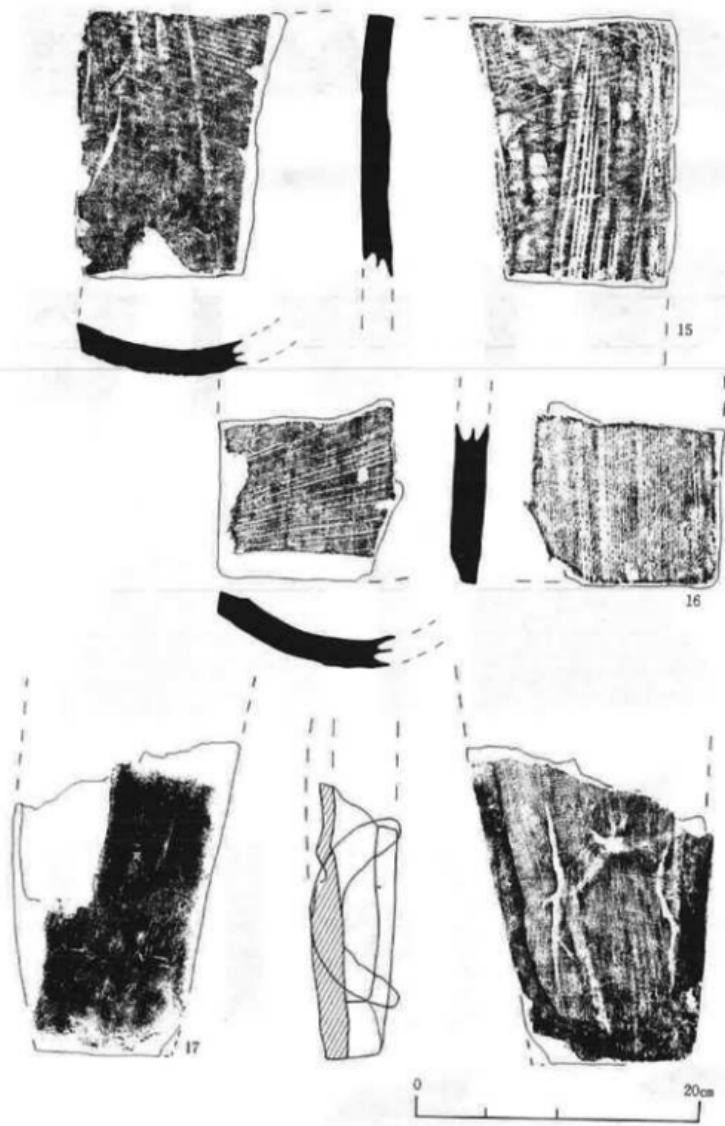
第19圖 出土瓦斯實測圖 1 (1 / 4)



第20圖 出土瓦類実測図 2 (1/4)



第21図 出土瓦類実測図 3 (1/4)



第22圖 出土瓦類實測圖 4 (1 / 4)

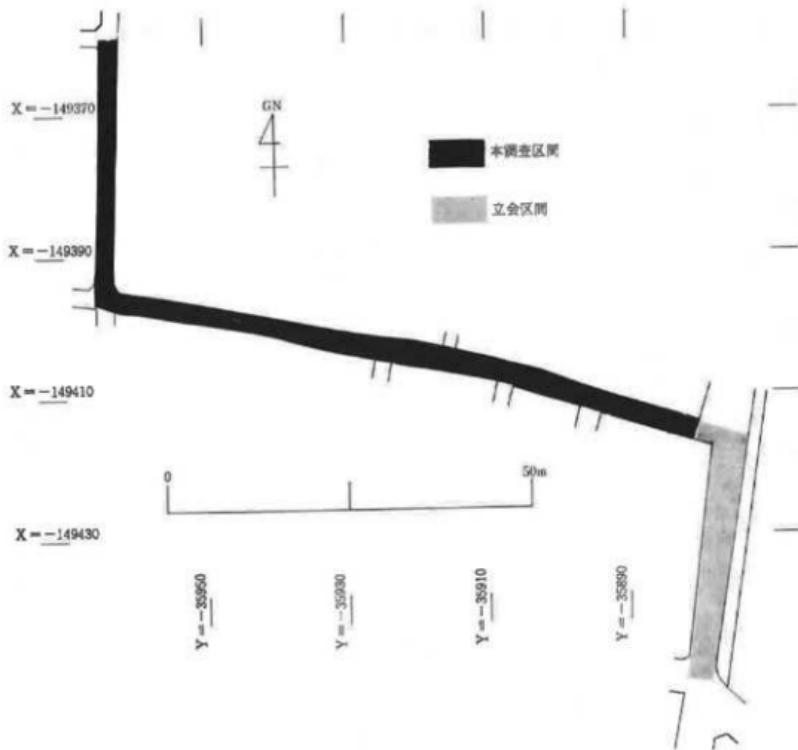
第7章 若江遺跡第45—2次調査概要

1 はじめに

昨年度より継続しているこの調査は、若江本町4丁目地内の第43次調査西トレンチ東端を起点とし、トレンチの幅1.2mで南へ37m、さらに幅1.5mで木村通りに至るまでの東へ91.5m総延長128.5m、総面積180m²を本調査区間とする。また木村通りの南北32.5mが立会区間となっている。

2 調査結果

調査地は東西に90m以上細長く伸びるために地層の変化も著しい。しかしながら無遺物層を除外し、遺物包含層と遺構面に着目すれば、調査地内の地層を大きく2分することができる。



第23図 調査地平板実測図(1/800)

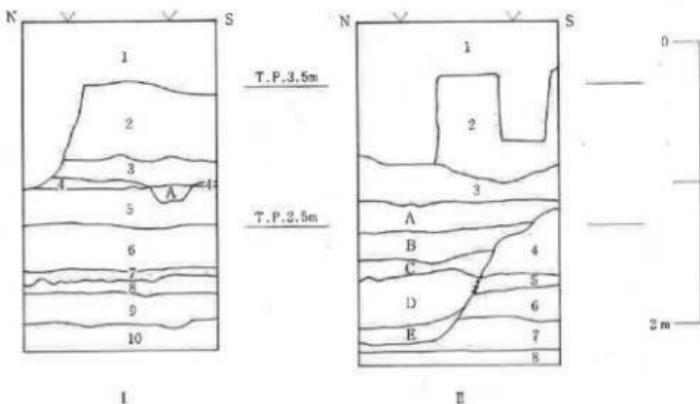
その根拠として第一に中世遺構面とその上層に位置する遺物包含層の相違、第2に古墳時代以前の遺物包含層と遺構面の有無を挙げ得る。

概ねY=-35925より西では中世包含層と遺構面は褐色系細粒砂混りシルト～粘土と黄色系シルトであり、Y=-35890より東では灰色系極細粒砂～細粒砂混りシルト～粘土及び極細粒砂～細粒砂と灰色系粘土に変化する。この間の35mは擾乱が著しいため、その変化点を明確にし得ないが、Y=-35900付近の遺構は黄色系シルトをベースとし、上層の包含層は灰色系極細粒砂～細粒砂混りシルト～粘土及び灰色系極細粒砂～細粒砂であるため、西から東へはまず包含層が変化し、その後に遺構面が変化していることがわかる。東側の包含層は、15世紀中頃の出山氏の内紛を題材とした『長禄寛正記』に、若江城の「四方八ヶ深田ナリ」と記されており、深田に相当するものと思われ、西側の包含層より遺物の出土量は少ない。

古墳時代の包含層も概ねY=-35925より西側だけにみられたが、これに対応する遺構面は検出されなかった。西から土質と出土遺物を記せば、灰色系極細粒砂から須恵器甕細片、褐色系細礫混り細粒砂～中粒砂から土師器高杯、灰色系細粒砂から土師器鉢、黄色系極細粒砂から

Y=-35,925以西		Y=-35,890以東
<ul style="list-style-type: none"> 褐色系細粒砂混りシルト～粘土。 粗粒砂～細礫多量、中粒砂微量含む。 T.P.3.9～3.3m 	包 中 含 層	<ul style="list-style-type: none"> 灰色系極細粒砂～細粒砂混じりシルト～粘土 灰色系極細粒砂～細粒砂 T.P.3.5m～2.6m
<ul style="list-style-type: none"> 黄色系シルト。 T.P.3.3～2.8m 	遺 中 構 世 面	<ul style="list-style-type: none"> 灰色系粘土 鉄分が斑点状に沈着。 T.P.2.6m
<ul style="list-style-type: none"> 灰色系極細粒砂。 褐色系細礫混じり細粒砂。 灰色系細粒砂。 黄色系極細粒砂。 T.P.2.7～2.3m 	包 古 含 層	
<ul style="list-style-type: none"> 灰色系粗粒砂～細礫。 中粒砂微量含む。 T.P.2.2～2.1m 	包 弥 含 生 層	
<ul style="list-style-type: none"> 灰色系細粒砂～シルト。 足跡検出。 T.P.2.1m 	遺 構 生 面	

第2表 包含層遺構面一覧表



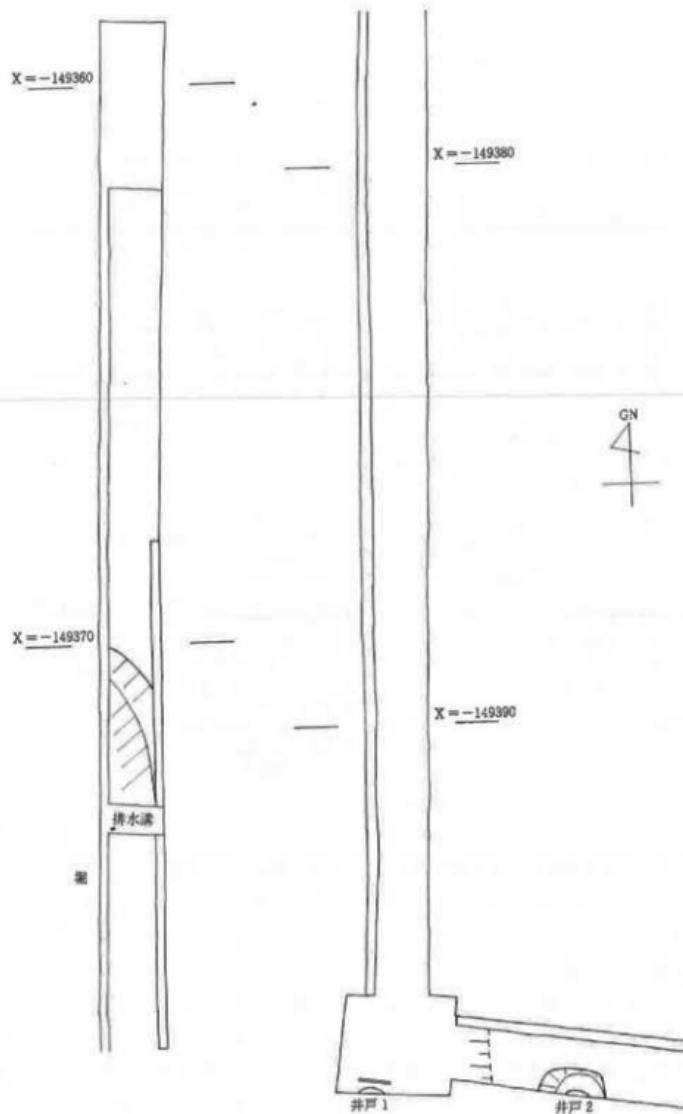
- I.
1. 盛土、模造土
 2. 7.5Y4/2灰オリーブ色細粒砂混り粘土
 3. 10Y4/1灰色細粒砂混りシルト
 4. 2.5Y4/4オリーブ黄褐色細粒砂
 5. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト
 6. 2.5Y4/2解灰黄色粘土
 7. 7.5Y4/1灰色中粒砂～粗粒砂
 8. 7.5Y2/1黒色シルト
 9. 10Y4/1灰色細粒砂混り粘土
 10. 2.5GY4/1暗オリーブ灰色粗粒砂～細粒砂
- A. 10Y4/1灰色シルトブロック混り細粒砂～中粒砂
- II.
1. 盛土、模造土
 2. 10BG3/1暗青灰色板細粒砂～細粒砂混り粘土
 3. 2.5GY暗オリーブ灰色細粒砂
 4. 5BG3/1暗青灰色粘土
 5. 10GY4/1暗緑灰色極粗粒砂～細粒混り中粒砂
 6. 5BG2/1青黒色粘土
 7. 10G5/1暗灰色細粒～中粒混り中粒砂～粗粒砂
 8. 10GY5/1緑灰色粘土
 - A. 5G4/1暗緑灰色細粒砂
 - B. 5BA/1暗青灰色シルト
 - C. 10G4/1暗緑灰色細粒砂～中粒砂
 - D. 10G3/1暗緑灰色シルト
 - E. 10GA/1暗緑灰色シルト

第24図 断面図(1/40)

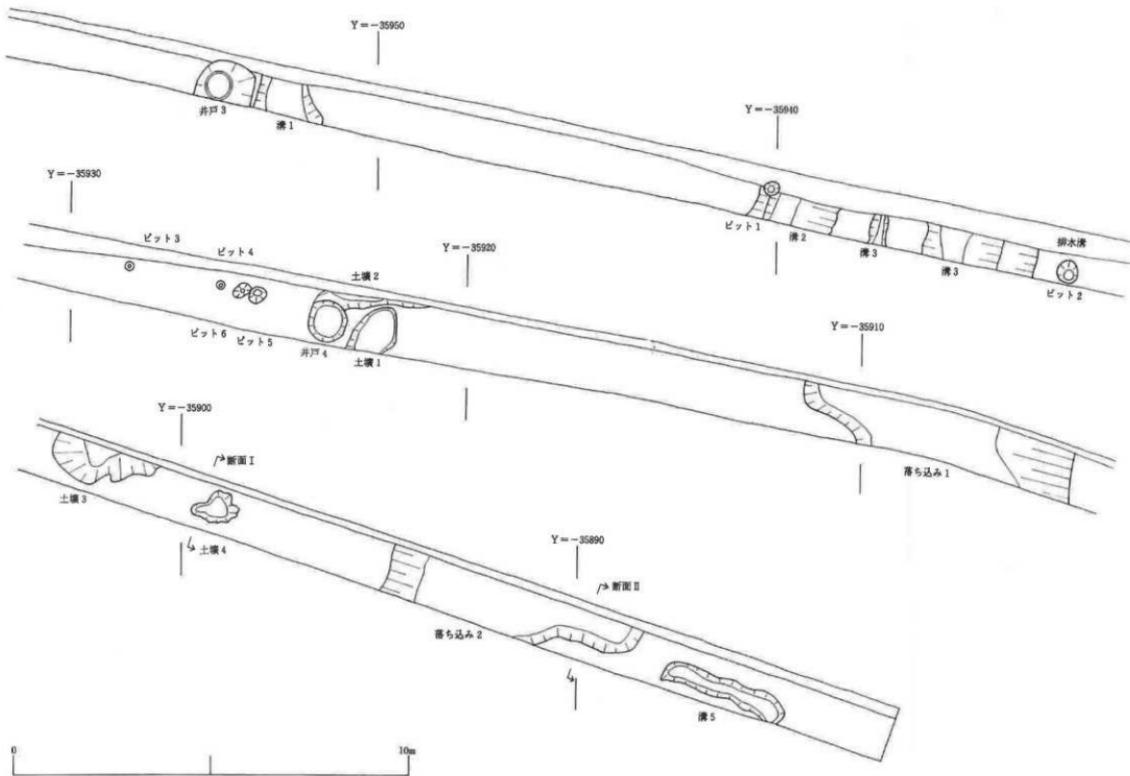
は土師器壺・高杯が出土し、その量は極めて少ないが、残存状態は良好なものが多い。

弥生時代の包含層と遺構面は、Y=-35955を中心約10mの範囲に極部的に検出された。層厚10cmの包含層である粗粒砂～細粒砂は、TP 2.1mの細粒砂～シルト層上面をベースとした弥生人足跡の埋土となっている。

遺構は中世の井戸、溝、ピット、土壙、堀、落ち込み、弥生人の足跡を検出している。X=-149370で検出した堀は、概ね80cmの深さで南へ約20mの調査地端を越えて延びる。このため調査地南東端で検出した井戸1は上部を削平され、TP 2.1mで検出されたが堀方は不明である。残存状況は深さ60cmで曲物4段であり、3分の2は調査地外へ広がる。この井戸に伴うものと思われる長さ60cmの角材が一点出土している。井戸1から東へ4mの地点で井戸2を検出した。柱には曲物を用い、最上段の4分の1だけが調査地内である。井戸1が堀によって上部



第25図 道橋平面図 1 (1 / 100)



第26図 造構平剖面 2 (1/100)

を削平されているのに対し、井戸2は層序で述べた黄色系シルト層上面の中世遺構面で検出した。このため堀の東肩は井戸1と井戸2の間に存在したものと思われる。井戸3は上段を長さ85cm前後、幅8.5cm前後、下段をおよそ半分の長さの41cm前後、幅8.5cm前後の板材を用い、それぞれ2本のタガで構組みし、井戸枠としている。深さ150cmを計る。溝1は調査地に直交し、深さ32cmを計る。ピット1は直径30cmの円形で深さ26cmを計り、その埋没後に溝2が掘り込まれている。溝2は幅2m、深さ40cmを計り、黒褐色(5YR2/1)粗粒砂～極粗粒砂を含んだ細粒砂混り粘土が埋土となっている。溝3は幅2.8m、深さ56cmを計る。溝内の堆積土は層厚24cmの黒色(5Y2/1)粘土で、細粒砂～中粒砂が微量混る。埋土は層厚32cmの黒褐色(5YR3/1)中粒砂混り粘土である。溝4は幅40cm、深さ16cmを計る。溝2～4はそれぞれ平行に走り、調査地とは直交する。ピット2は直径40cmの円形で深さ16.5cm、ピット3は直径20cmの円形で深さ13cm、ピット4は直径20cmの円形で深さ12cm、ピット5は直径40cmの円形で深さ22cm、ピット6は長径45cm、短径25cmの梢円形で深さ38cmを計る。井戸4、土壤1・2は搅乱によって上部を削平され、湧水も激しいため詳細は不明である。井戸4は直径60cmでタガのみ検出した。土壤1は深さ30cm以上を計る。落ち込み1は幅5.5～7m、深さ48cmを計る。土壤3は長径2.6mの不定形で深さ64cm、土壤4は長径1.2mの不定形で深さ16cmを計る。落ち込み2は幅4.2～6.7m、深さ1mを計る。溝5は調査地と平行に延び、長さ3.3m、幅40～70cm、深さ11cmを計る。

Y=-35955を中心とした約10mの範囲のT P 2.1mで弥生人の足跡を検出した。その数は10個前後である。その大きさが明瞭なものは23cm、進行方向を断定できるものは南東から北西へ向かって、調査地内に左右ひとつずつ痕跡を残す。

3 立会

木村通りは南行き一方通行で交通量も多く、迂回路の確保も困難なため、夜間工事に伴う立会区間となり、柱状図の作成と残土内からの遺物採集を行った。

第1層 盛土・搅乱土。地表下130cmまでは上下水道、電話線等の地下埋設に伴う搅乱で、

中世包含層は消失している。

第2層 黒褐色系粘土。層厚20cm。

第3層 灰色系粘土。層厚50cm以上。

第2層以下の約2トンの残土内から土師器片7、瓦器片3、須恵器片1、陶器片1が出土した。諸埋設管の工事による削平で包含層が消失していることから、遺物の出土は木村通りに遺構の存在を想定させる。

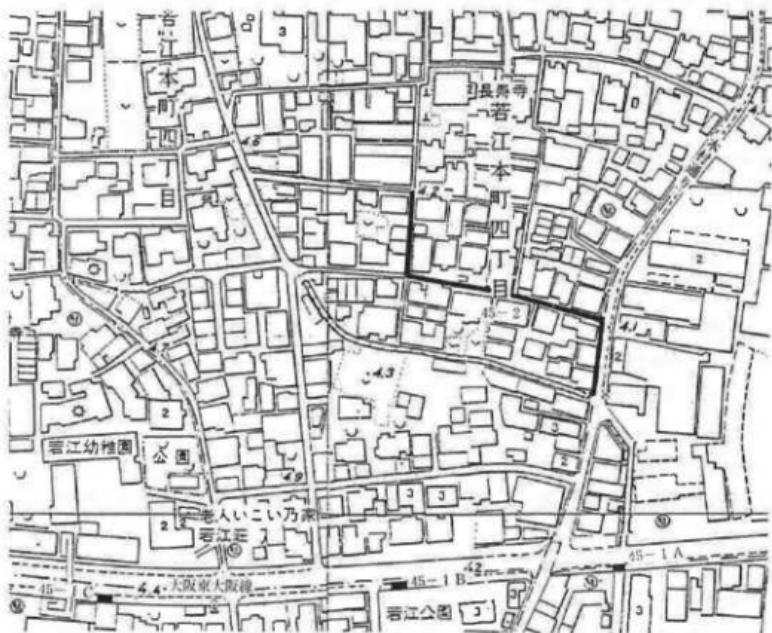
4 まとめ

出土遺物は現在も整理中であるため、現場調査で得られた知見をまとめれば以下の通りである。Y=-35925より西側では中世包含層と遺構面は、褐色系細粒砂混りシルト～粘土と黄色

系シルトであった。且つ土質・土色の違いはあれ古墳時代の包含層が検出された。これより東側では古墳時代の包含層が存在せず、先ず中世包含層が灰色系極細粒砂～細粒砂混りシルト～粘土及び灰色系極細粒砂～細粒砂に変化する。その後に遺構面が灰色系粘土に移行する。複雑の影響もありその変化点を明確にしえないが、Y=-35890では包含層及び遺構面を形成する層は変化しており、それより西35mは包含層のみが変化した過渡的な状態と考えられる。若江遺跡における弥生時代の遺構は稀薄で、従来の調査では方形周溝墓、畦畔、足跡がわずかに検出されていたが、今回の調査でも極部的ではあるが足跡を確認した。中世包含層が削平された木村通りから遺物が出土したことから、遺構の存在が想定される。

現場調査、整理作業には以下の補助員の協力を得ている（五十音順）。

天津秀治、碇 雄神、石割茂紀、高橋秀和、猪 順彦、中木鹿車郎、中津漬やよい、福山雅美、山中鹿次



第27図 若江遺跡第45次調査地図(1/2,500)

第8章 若江遺跡第46次調査概要

1 はじめに

今回の調査はシールド工法による下水管渠築造工事であるため、若江南町1丁目地内に、 $35m^2$ の発進坑（A地区）と、そこから北へ180mの府道大阪東大阪線（旧四条長堂線）に面する地点の到達坑（B地区）の $12m^2$ 、計 $47m^2$ が対象となった。又、その間の人孔を設置する2地点が立会となっている。

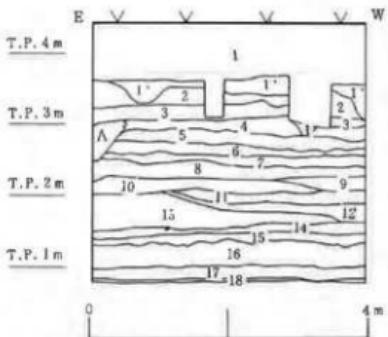
A地区は若江鏡神社鳥居から府道八尾枚方線へ通じる道路上で、鳥居から東へ $80m^2$ の地点に最長東西5m、南北7.5mのトレーナーが設定された。この地点は、これまでに実施された若江遺跡における発掘調査のうちで最東南端に位置し、遺跡分布図上でも若江遺跡のほぼ東南隅に該当する。このためA地区の調査は若江遺跡の範囲確認という要素を持つと言える。B地区は東西3m、南北4mのトレーナーであるが、北側約 $3m^2$ は平成2年度に実施した第45-1次調査地と重複する。



第28図 調査地位図 (1/2,500)

2 A地区の調査結果

現地表はT.P.4.5m前後であり、地表下3.7mのT.P.0.8mまで調査を実施した。上部はガス・水道の地下埋設物によって、深い所では地表下1.7mまで搅乱を受けている。T.P.3.7~3.0mには、中世の遺物が出土する細礫を少量含んだ細粒砂混りシルト～粘土層がみられ、第2層と第3層に細分できる。かつての畑作に伴う耕土と思われ、第3層は第2層より細粒砂が多いため粘性が乏しい。遺物の出土量は遺跡中央部の包含層と比べて、極めて少ない。層厚10~30cmの第4層は、古墳時代の遺物が出土する細礫～中礫を少量含んだ細粒砂～中粒砂層であり、調査地南部では鉄分の沈着が著しい。この上面をベースに土壤2が掘り込まれている。同一レベルの調査地北側では、同時期に堆積したにぶい黄褐色(10YR4/3)粘土層がみられ、この層の上面は中世の遺物が出土した土壤1の遺構面となっている。T.P.2.9~2.2mの第5層～第8層は極細粒砂～粘土を中心とした層であり、T.P.2.2~1.5mには、いわゆる砂層が堆積している。この砂層は第9層～第13層の5層に細分でき、第10層と第11層は南壁断面では酸化状態であるが、東壁断面では還元状態となっている。T.P.1.4m前後の暗緑灰色細粒砂に中粒砂～粗粒砂のラミナが混る第16層の上面は、凹凸が著しいが遺構は検出されなかった。第5層以下に遺物の出土はみられず、第12層～第17層は植物遺体を含んでいる。



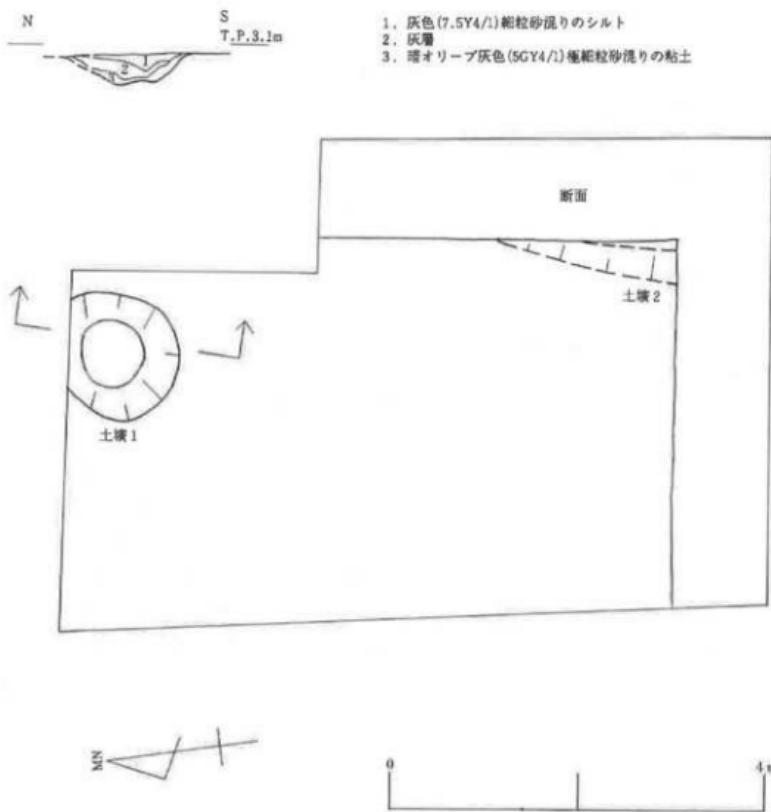
1. 盛土、 1' 搅乱土
2. 10YR4/6褐色細粒砂混りシルト～粘土
3. 5 YR4/6赤褐色細粒砂混りシルト～粘土
4. 10YR6/1褐色細粒砂～中粒砂
5. 5 YR5/6明赤褐色細粒砂～シルト
6. 2.5Y6/2灰黄色粘土
7. 2.5Y5/1黄灰色細粒砂
8. 5 Y6/1灰色シルト混り細粒砂
9. 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
10. 5 Y6/3オリーブ黄色中粒砂～粗粒砂

11. 5 Y6/3黄色粗粒砂
12. 7.5Gy3/1暗緑灰色極細粒砂～細粒砂
13. 2.5Gy5/1オリーブ灰色中粒砂～粗粒砂
14. 5 Gy3/1暗オリーブ黒色シルト
15. 10Y3/1オリーブ黒色シルト
16. 10GY4/1暗緑灰色中粒砂～粗粒砂のラミナ混り細粒砂
17. 5 PB3/1暗青灰色細粒砂～シルト
18. N6/ 灰色粗粒砂～極粗粒砂
- A. 7.5Y5/1灰色シルトと中粒砂の鉄分沈着層のラミナ

遺構では土壤を2基検出している。

土壤1は調査地北端のT.P.3.0mのにぶい黄褐色粘土層上面で検出したが、一部は調査地外へ広がる。直徑130cmのはば円形を呈し、深さは約30cmである。遺構内の3層からなる層序のうち、中央には灰が20cmの厚さまで堆積した層がみられ、瓦などの出土遺物にも二次焼成の痕跡として煤が付着していることから、この

第29図 A地区南壁断面図(1/80)



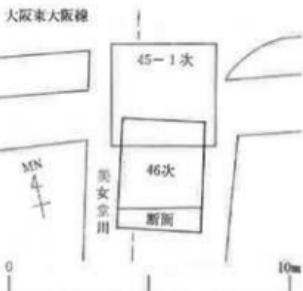
第30図 A地区遺構平面図(1/60)

土壤内で火を使用したものと思われる。遺物では土師器、須恵器、瓦器、白磁、瓦が出土している。

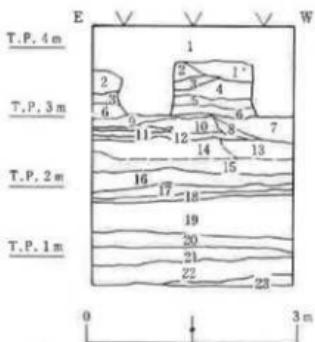
調査地南東隅の土壤2は、その堆積土にラミナ状に混る中粒砂と、遺構面を形成する第4層に、それぞれ鉄分の沈着が著しいため輪郭は不明瞭であり、深さは50cmで遺物は出土しなかった。

3 B地区の調査結果

現地表はTP4.3m前後であり、地表下3.7mのTP0.6mまで調査を実施したが、遺構は検出されなかつた。深いところでは上部130cmまでが、現在では暗渠化された美女堂川、水道、ガス等の地下埋設に伴い擾乱されている。TP3.5~2.7mの第2層~第7層は漏水状態で堆積したものと思われ、シルト~粘土を中心構成される粘性の強い土層である。第4層、第5層からは土師器の細片、第6層からは土師器、瓦の細片が出土している。第7層の下方では植物の炭化物、黒色(2.5GY2/1)シルトが層をなし、土師器皿・羽釜、瓦器柄、弥生土器甕、桃の種子が出土している。第12層は東から西へかけてシルトが極細粒砂に漸移する。



第31図 B地区位図(1/200)



TP2.4~2.2mの第13層からは土師器、須恵器の細片、TP2.0~1.8mの第16層からは弥生土器の細片が出土している。TP1.9~1.3mの第19層灰白色中粒砂~粗粒砂には、厚さ3cm程の緑灰色(10G5/1)極細粒砂~シルト層が8本みられ、西側では下方へ傾斜している。この第19層はA地区の第9層~第13層に相当するものと思われる。第16層~第23層は植物遺体を含む。

- | | | |
|-------------------------------|----------------------------|---------------------------------|
| 1. 粘土 | 1. 擾乱土 | 13. 2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルトブロック混り細粒砂 |
| 2. 10G3/1暗緑灰色極細粒砂混り粘土 | 2. 10Y6/1灰色細粒砂~中粒砂 | |
| 3. 10GY4/1暗緑灰色細粒砂混り粘土 | 15. 5Y2/2オリーブ黒色シルト~粘土 | |
| 4. 10G5/1緑灰色細粒砂とシルト~粘土の互層(4層) | 16. 5G4/1暗緑灰色シルトブロック混り極細粒砂 | |
| 5. 5G4/1緑灰色細粒砂混り粘土 | 17. 5GY5/1オリーブ灰色細粒砂 | |
| 6. 5G5/1暗緑灰色シルト混り細粒砂 | 18. 10Y4/1灰色粘土 | |
| 7. 5GY2/1オリーブ黑色極細粒砂混り粘土 | 19. 10Y7/1灰白色中粒砂~粗粒砂 | |
| 8. 7.5Y4/1灰色細粒砂 | 20. 2.5GY3/1暗オリーブ灰色シルト~粘土 | |
| 9. 10GY6/1暗緑灰色細粒砂 | 21. 5GY5/1オリーブ灰色中粒砂 | |
| 10. 10G4/1暗緑灰色細粒砂混り粘土 | 22. 7.5GY4/1暗緑灰色粘土 | |
| 11. 7.5GY5/1緑灰色細粒砂 | 23. 7.5Y2/1黑色シルト | |
| 12. 10GY4/1暗緑灰色極細粒砂~シルト | | |

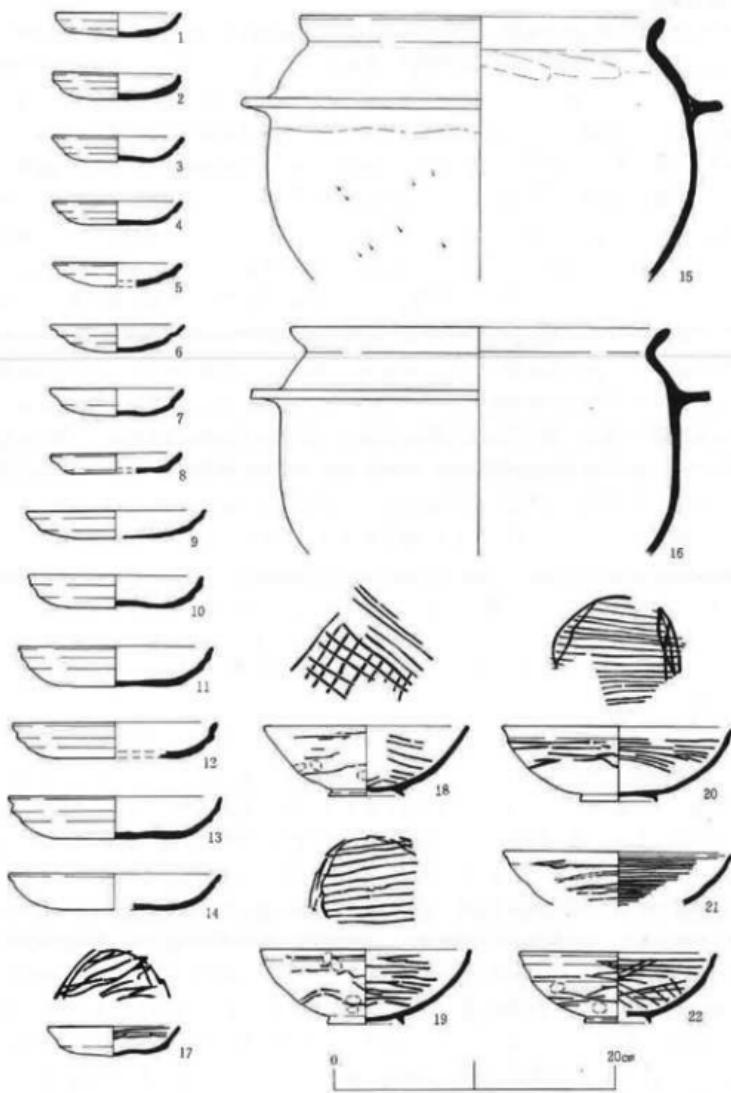
第32図 B地区南縁断面図(1/80)

4 出土遺物

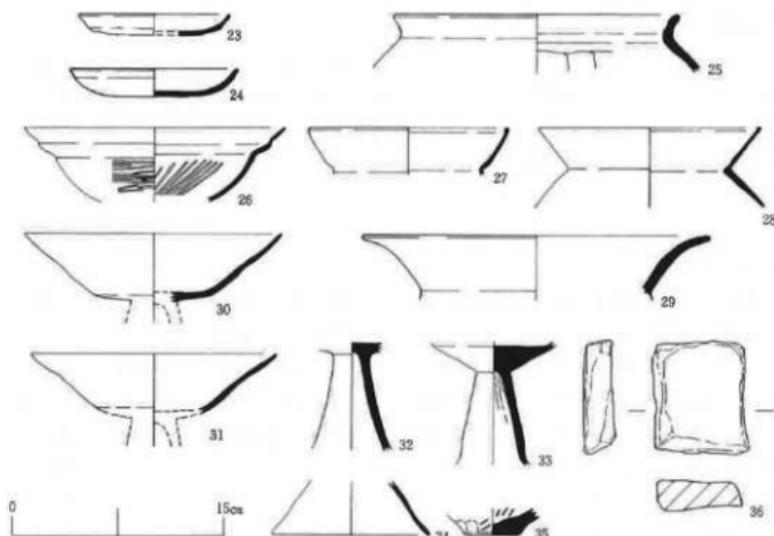
A地区の土壤1からは土師器、須恵器、瓦器、磁器、瓦が出土している。土師器皿は体部に施した2回のヨコナデによって2段に屈曲するもののうち、1・2・10・12・13は上段の屈曲からほぼ直立して口縁部に至り、3・4・5・6・9・11は下段の屈曲から体部が開き気味に口縁部に至る。7・8・14は2段の屈曲が不明瞭である。いずれも底部はユビオサエを施し、口縁端部を丸くおさめている。色調は1・3・6・8・13・14が褐色系、それ以外は白色系である。15・16は土師器羽釜である。いずれも口縁部は「く」の字形に折り曲げて外反させ、口縁端部を丸くおさめる。15は外面体部にヘラケズリ、口縁部にヨコナデ、内面体部にナデを施す。外面の色調は浅黄橙色(7.5YR8/4)を呈する。内面体部の焦げつきと外面の煤付着は顕著である。16は側が水平方向に伸び、端部はわずかに凹んだ面を持つ。外面の色調はにぶい黄橙色(10YR7/2)を呈する。17は瓦器皿であり、見込みにジクザグ状の平行線文を施す。炭素の吸着は良好で、色調は暗灰色(N3/-)を呈する。18~22は瓦器碗である。いずれも外面体部のミガキ調整は簡略化され粗雑である。18は見込みに太い格子状暗文を施す。19は見込みの暗文は平行線文であり、高台は断面三角形を呈する。20は口縁部がわずかに外反し、端部を丸くおさめる。見込みには内面体部のヘラミガキと比べて細い平行線文が施される。21は口縁部内面に沈線を持つわゆる大和型瓦器碗である。内面体部には他の和泉型より細いヘラミガキを、圈線状に密に施す。22は炭素の吸着が不十分なため、灰白色(N8/-)を呈し、器形の歪みも大きい。

A地区的第2~3層は中世の遺物包含層である。23・24は土師器皿であり、いずれも平らな底から体部が屈曲して外上方へ立ち上がる。25は土師器甕であり、口縁部は短く外反させ、端部を丸くおさめる。内面体部にはヘラ状工具による調整痕が残る。色調は浅黄橙色(7.5YR8/3)を呈する。

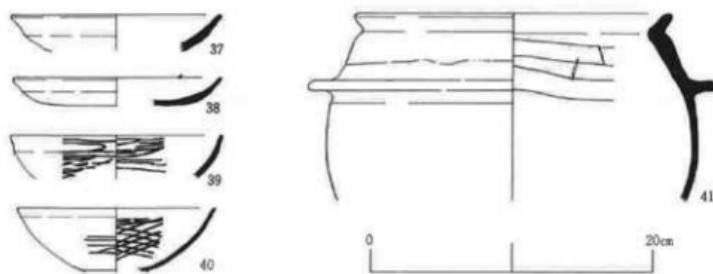
第4層からは古墳時代の遺物が出土している。26は小型鉢であり、口縁部と体部の境に段を有する。外面体部は横方向にヘラミガキを施し、内面には放射状の暗文が認められる。27・28は甕である。27は口縁部がやや内弯気味に立ち上がり、端部は内側へ肥厚し丸くおさめる。28は口縁部が「く」の字形に外反し、ほぼ直線的に端部に至る。端部は内側へ肥厚し内傾するが、27程の丸味はない。29は甕である。口縁部は大きく開きながら端部に至る。胎土には角閃石の含有が顕著であり、生駒西麓産である。30~33は高杯であるが、いずれも風化が著しいため調整法は不明である。30は杯部下半に稜を持ち、口縁端部にかけて大きく広がる。色調は灰白色(10YR8/2)を呈する。31は杯部が大きく広がるが、下半の稜は目立たない。色調は浅黄橙色(7.5YR8/4)を呈する。32は脚柱部から縁部へ外反しながら広がり、33は脚柱部が内弯気味に広がりながら縁部へ至る。内面には絞り目が残る。34は小型器台である。ほぼ直線的に脚部が広がり、端部を丸くおさめる。色調は淡橙色(5YR8/3)を呈する。35は弥生土器甕である。内面底部は凹み、ヘラ状工具による搔き跡が残る。外面はタキ目とユビオサエによる指頭圧痕が残る。36は縁泥片岩と思われる板状を呈した砥石であり、表裏2面を砥石面とし、うち1



第33图 A地区土壤1出土遗物实测图(1/4)



第34図 A地区包含層出土遺物実測図(1/4)



第35図 B地区包含層出土遺物実測図(1/4)

面は使用によって凹面を呈する。色調は明緑灰色(5G 7/1)である。

B地区からの出土遺物は極めて少ない。37は出土層位不明であるが、その他は第7層からの出土である。37・38は土師器皿であり、いずれも外面体部下半はユビオサエ、上半はヨコナデを施し、内面は丁寧なヨコナデで平滑に仕上げる。色調は白色系である。39・40は瓦器椀であるが、内外面のミガキ調整はいずれも粗雑である。41は土師器羽釜である。口縁部は「く」の字状に短く外反させる。体部内面にはヘラ状工具による調整痕が残る。破断面には二次焼成の痕跡がみられ、体部内面の焦げつきと外面の煤付着は顕著である。

5 立会

シールド工法による下水管布設後、人孔を設置する2地点が立会となっている。薬剤注入後にNo 1は直径1.7m、No 2は1.35mのライナープレートを設置するため、土層の断面観察も困難であった。このため機械掘削による残土内から遺物の採集のみ行った。No 1からは土師器、No 2からは土師器、須恵器、陶器が微量出土しているが、いずれも細片のため図化し得るものはない。

6まとめ

今回実施の若江遺跡第46次発掘調査A地区は、これまでの当遺跡における発掘調査及び遺跡分布図上、最東南端に位置する。このためA地区の調査は、若江遺跡の範囲確認という意味付けができる。その結果、古墳時代の遺物包含層と、中世の遺構及び遺物包含層が確認され、当遺跡の範囲がさらに東南に広がる可能性もある。調査地の範囲が狭いため、遺構の疎密に関するでは断定しえないが、中世包含層からの遺物の出土量は、遺跡中央部に比べ極めて少ない。混入による弥生土器も出土しているが、隣接する山賀遺跡のように純然たる弥生時代前期の包含層は検出されなかった。

B地区は平成2年度実施の第45-1次調査地と一部重複することとなった。しかしながら、第45-1次調査で課題を残した遺物の出土が確認され、一部の層序について年代を明らかにしえたものと思う。

現場調査、整理作業には以下の調査補助員の協力を得ている（五十音順）。

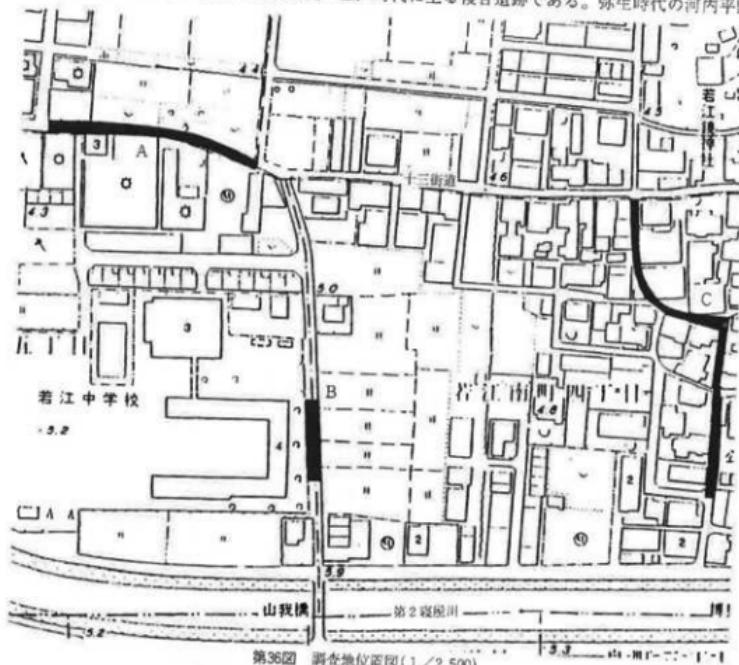
天津秀治、碇 雄神、高橋秀和、巽 調彦、中木屋卓郎、中津漬やよい、福山雅美。

第9章 若江遺跡第47次・山賀遺跡第5次調査

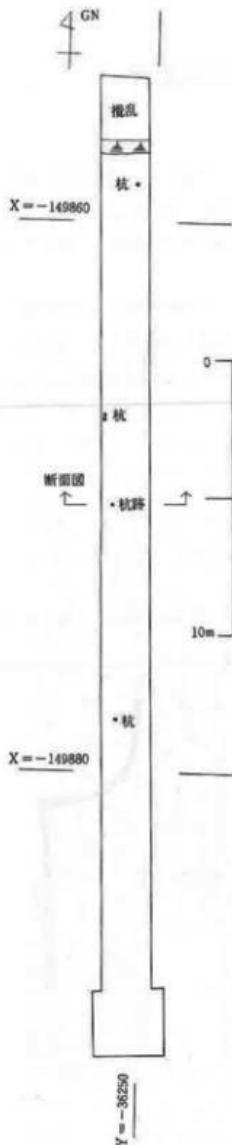
1 はじめに

今回実施の調査は、東大阪市域の南限にあたる若江南町3～5丁目地内にA地区 $142m^2$ 、B地区 $66m^2$ 、C地区 $176m^2$ を設定している。C地区北部約60mは若江遺跡であるが、それ以南とA・B地区は山賀遺跡の範囲である。調査は工事の都合上、B→C→Aの順で着手し、現在も継続中である。

若江遺跡は若江北町・若江本町・若江南町の東西 $650m$ 、南北 $950m$ の範囲に広がる弥生時代～江戸時代に至る複合遺跡である。弥生時代の遺構では畦畔、方形周溝墓が検出され、文献からは平安時代～室町時代にかけて若江寺が存在したことが窺えるが、その遺構は未だ検出されていない。南北朝期には若江城が築かれたが、天正八年（1580）に石山戦争が終結し、統一権力による戦後処理の一環として廢城となった。山賀遺跡は八尾市域から第2寝屋川を挟み、若江西新町・若江南町に広がる縄文時代～江戸時代に至る複合遺跡である。弥生時代の河内平野



第36図 調査位置図 (1/2,500)



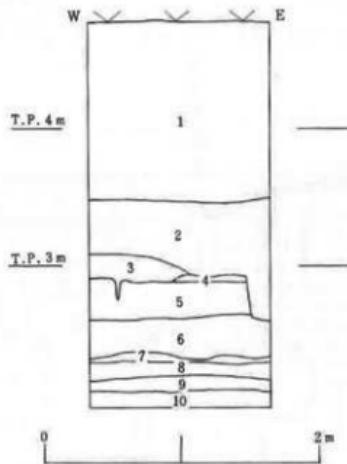
第37図 B地区遺構平面図(1/200)

において、もっとも早く人々が定住生活を始めたところであり、前期の遺構では水田、据立柱建物、環濠状遺構などが検出されている。

2 B地区の調査結果

若江南町5丁目地内の山賀遺跡第2次発掘調査第7ピットに下水管を接続するため、若江中学校正門前の道路を南北36mについて実施した。

現地表はTP4.8m前後であり、地表下1~1.5mまでは近年の盛土、その下には層厚40~50cmの細粒砂混り粘土層がみられ、調査地東側では溝状に30cmの深さで落ち込んでいる。このよう



1. 盛土
2. 5GY4/1暗灰色細粒砂混り粘土
3. 10YR7/6明黄褐色中粒砂～粗粒砂
4. 5Y7/2灰白色細粒砂
5. 10Y4/1灰白色シルトと5GY5/1オリーブ灰色極細粒砂の互層(5層)
6. 5Y7/2灰白色中粒砂～粗粒砂
7. 7.5Y4/1灰白色極細粒砂
8. 10Y4/1灰白色極細粒砂～シルト
9. 2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土
10. 5GY4/1暗オリーブ灰色細粒砂混り粘土

第38図 B地区断面図(1/40)

な状況は周辺の第2次調査第6・7ピットにはみられるが、若江中学校舎、体育館建設に伴う第1次、第3次調査にはみられず、第2次調査第6ピットから今回実施の調査地南端に至る現道路下の南北90mにかけて確認された。江戸時代に作製された絵図には当時の水路が描かれ、そのひとつが当調査地に比定されており、近世以後の遺物を含んだ第2層がこれに該当する可能性もあるが、切り込みは調査地外であるため確証は得られなかった。第5層の西端には杭を打ち込んだ痕跡がある。この杭跡から北へ3.1m、南へ7.8mの延長線上と調査地北端で杭を検出している。直径4~9cm、長さ45~80cmのもので、先端は第2層中に達している。この杭に打ち込まれている釘から近現代のものと思われ、あるいは若江中学校建設以前の水田耕作に伴うものかと思われる。第3層~第10層は無遺物で、第6層~第9層は植物遺体を含む。今回の調査深度では弥生時代の遺構面には達しなかった。

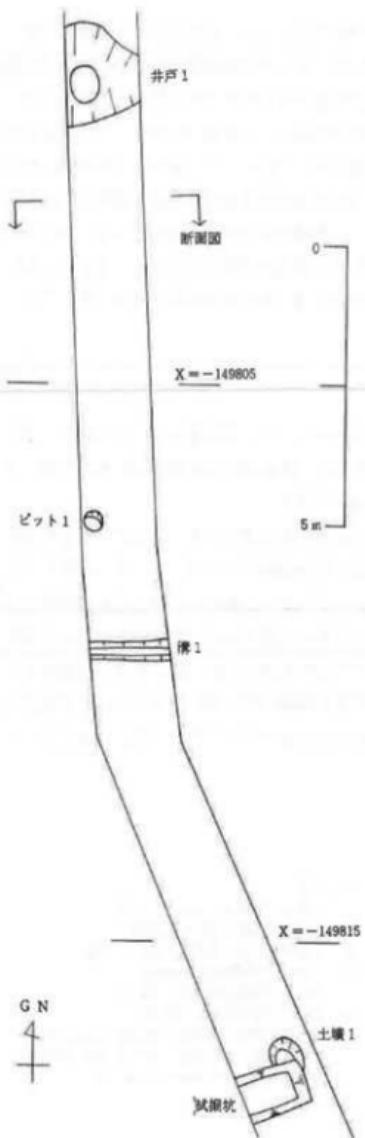
3 C地区の調査結果

若江遺跡第26次発掘調査第2ピットに下水管を接続するため、若江遺跡から山賀遺跡にまたがる若江南町4丁目地内の延長156mが調査対象となる。調査は現在も継続中であるため、十三街道から南へ30mまでの結果を記せば以下のとおりである。

現地表はT.P.4.5m前後であり、地表下0.7~1.5mまでは既設の水道、下水道の地下埋設に伴い搅乱されており、このため中世遺物包含層は削平され消失している。T.P.3.9m以下にはいわゆる砂礫層が1.9m以上の厚さで堆積している。この層の上部からは布留式土器が出土しているので、最終的には古墳時代前期までに堆積したものと思われる。T.P.3.2~2.8mには鉄分が沈着しており、第2寝屋川改修以前の地下水位を示すものと考えられ、現在では湧水は全くみられない。この砂礫層上面で、それより上層の地下埋設工事に伴い削平された中世遺構面から掘り込まれた遺構が、わずかながら残存しており、現在のところ井戸、溝、土塁、ピット



第39図 C地区断面図(1/40)



第40図 C地区遺構平面図(1/100)

を検出している。

井戸 1 は上段に径約60cm、深さ53cmの瓦質甕、下段には幅4cm、長さ36cm前後の板材22枚を桶組みし、井戸枠としている。堀方内の瓦質甕下部外側には、土器片、瓦、石を高さ約20cm積み上げたものが巡り、且本來の遺構面は井戸検出の砂礫層より上層に存在したと思われ、井戸内から多量の瓦が出土していることから、瓦質甕のさらに上段に瓦石積みの井戸枠が存在した可能性がある。土壌 1 は長径50cmの椭円形で深さ34cmを計るが、幅30~40cmで調査地に直交する溝 1 は深さ18cm、ピット 1 は深さ8cmであり、いずれも浅い。土壌 1 からは土師器皿・羽釜、須恵器甕、瓦器碗、瓦が、ピット 1 からは土師器細片が出土している。

現場調査は平成4年度に継続しているため、ここではその中間報告とし、出土遺物を含めた詳細は後日に譲りたい。

尚、調査の実施にあたっては、以下の調査補助員の協力を得た（五十音順）。

天津秀治、碇 雄神、佐藤紀久、高橋秀和
異 調彦、向内信勝、山田幸生

図 版



1. 壁 2



2. 土塙 3

圖版第二 上小阪遺跡第4次調查



1. 溝6断面

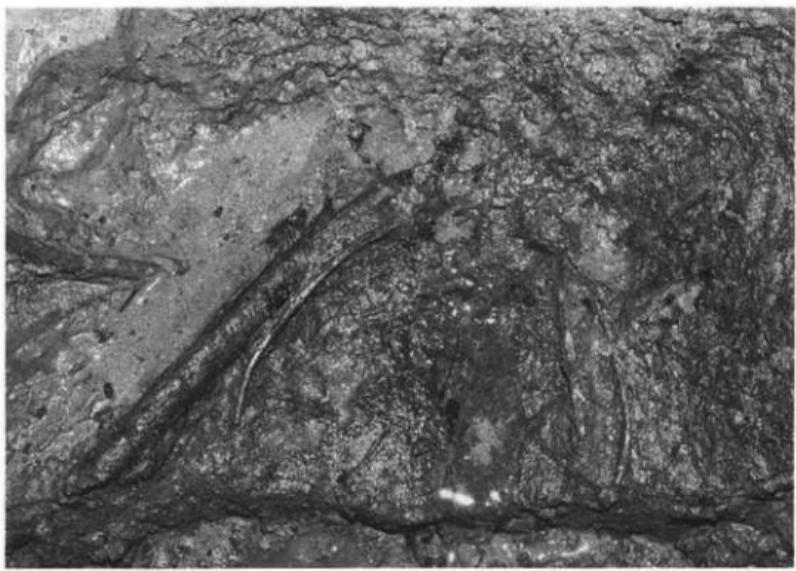


2. 溝6断面

圖版第三
上小阪遺跡第4次調査



1. 井戸 1

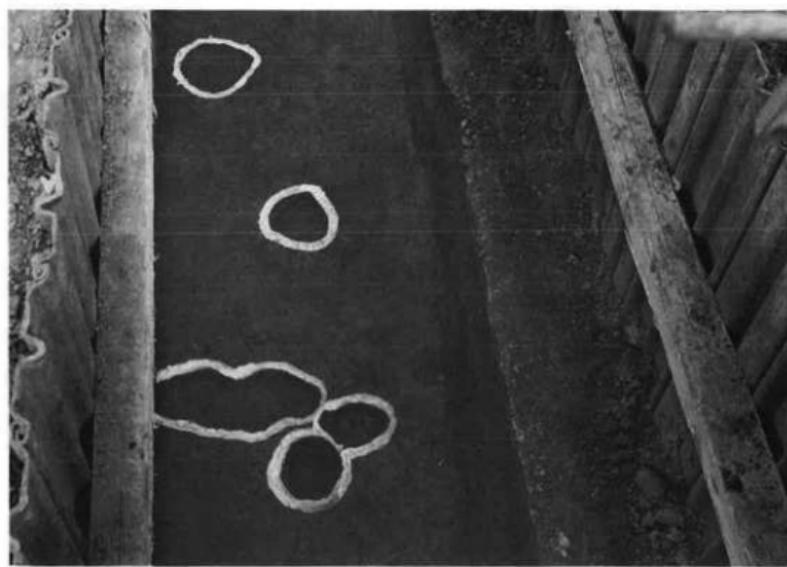


2. 井戸 1 内網籠検出状況

圖版第四 上小阪遺跡第4次調査

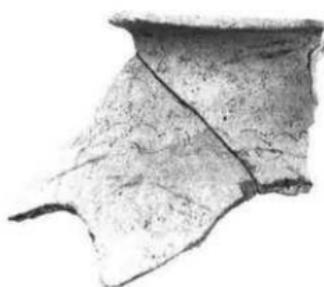


1. 西半部断面



2. 西半部柱穴検出状況

圖版第五 上小阪遺跡第4次調查 遺物

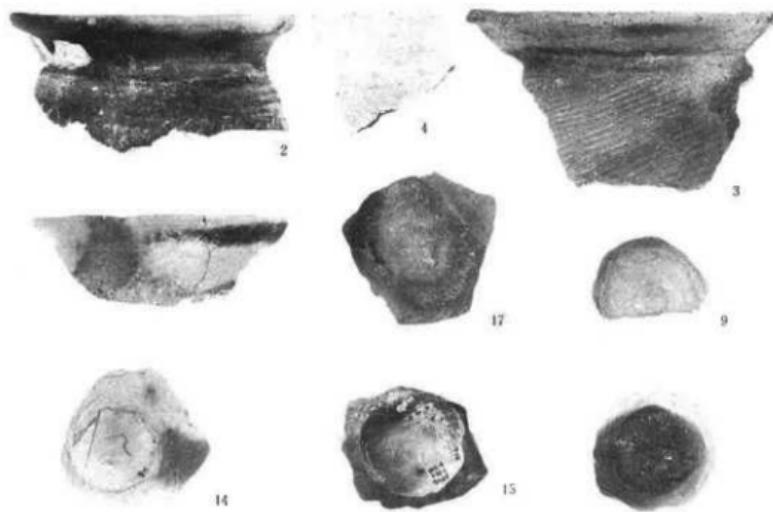


20

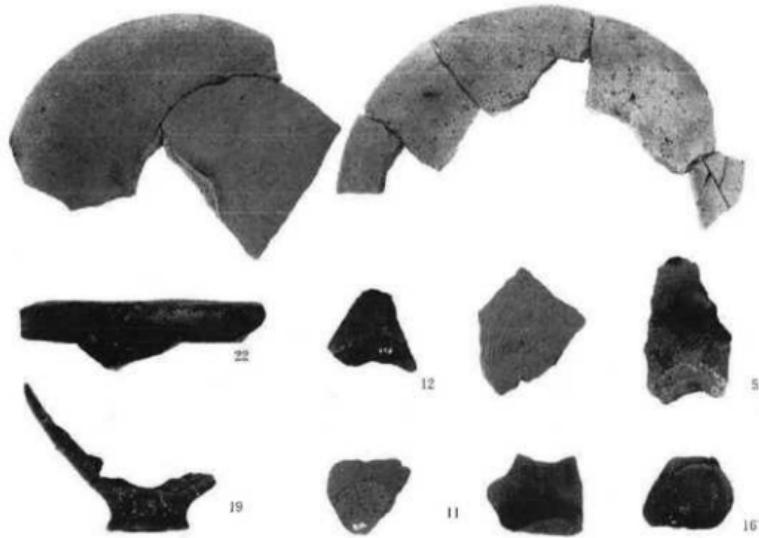
18

遊・甕・鉢・高杯

圖版第六 上小阪遺跡第4次調查
遺物



1. 瓦



2. 壺、甕、鉢、高杯

圖版第七 上六万寺遺跡第3次調査



1. 調査風景
(調査地中央部)



2. 調査風景
(試掘地点付近)



3. 地層断面
(調査地西部)

圖版第八 上六万寺遺跡第3次調査 遺物



2



23



11



28



19

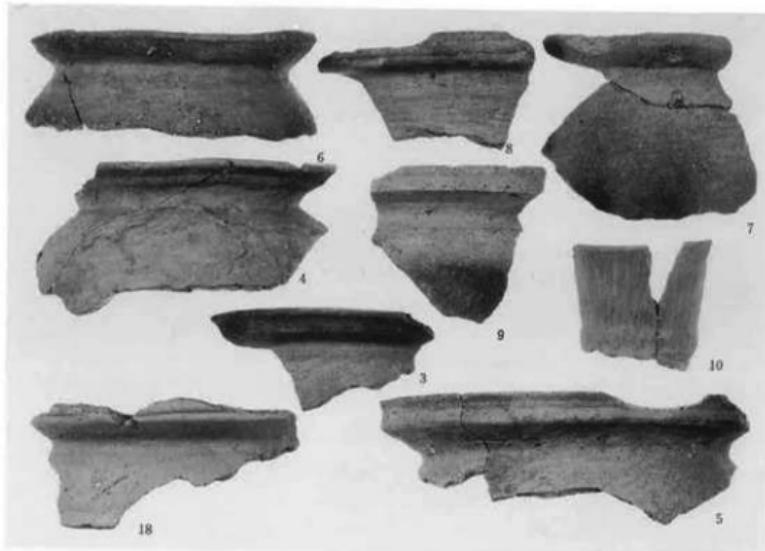


13

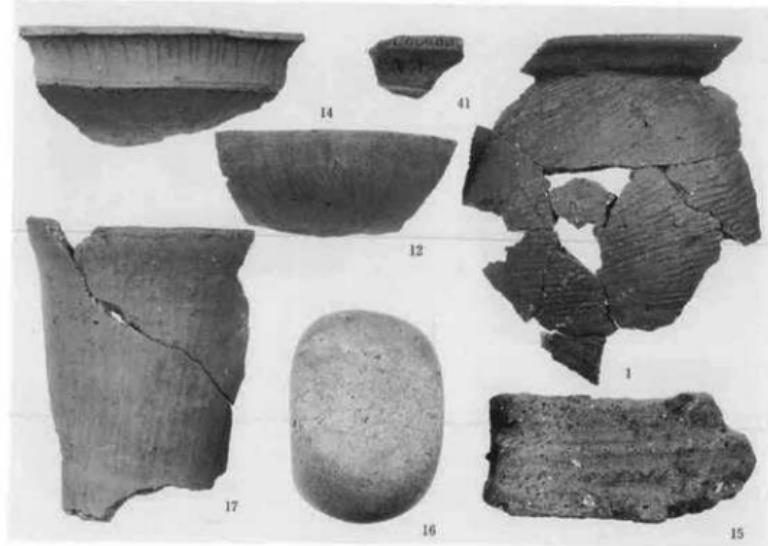


32

弥生土器 2, 11・13・19 土師器23・28 球窓器32

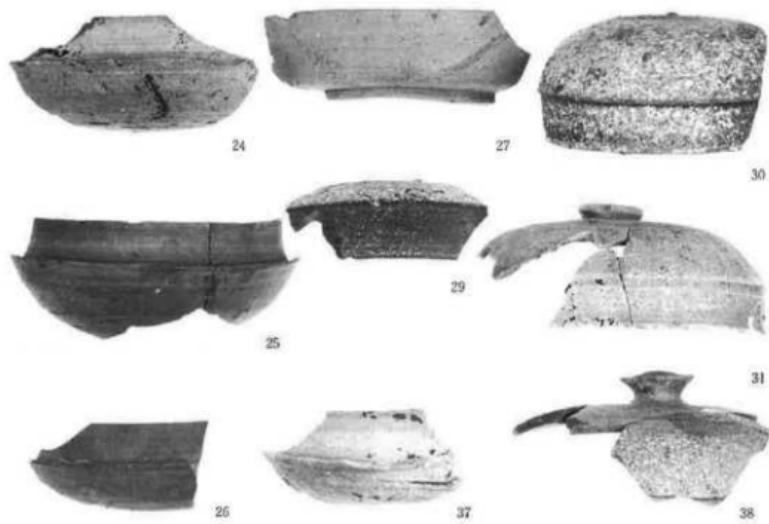


1. 弥生土器

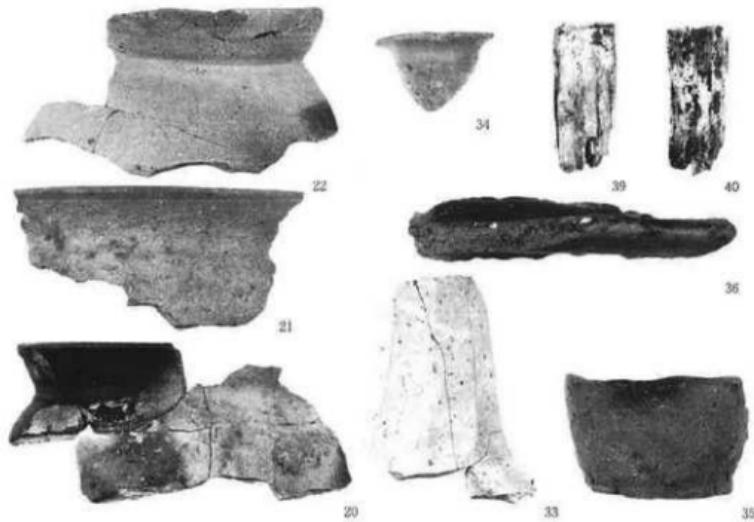


2. 弥生土器 1・12・14・15・17・41 磨石16

圖版第十 上六万寺遺跡第3次調查
遺物



1. 須恵器



2. 土師器 20~22・33~36 馬齒 39・40

圖版第十一 瓜生堂遺跡第39次調查



1. II区調査風景



2. II区現代水路



3. III区南壁土層

圖版第十二 瓜生堂遺跡第39次調查



1. II区北部
子持壺出土状況



2. II区北端部
土器出土状況



3. II区南部4層上面

圖版第十三 巨摩寺遺跡第7次調査



1. Ⅱ区掘削状況

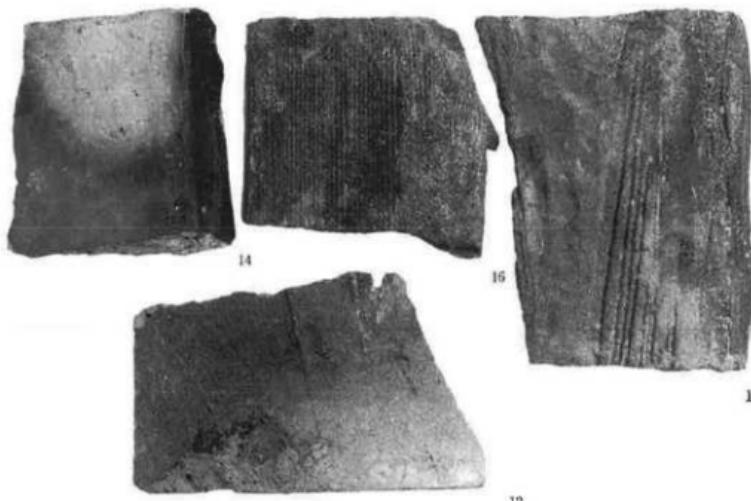


2. No. 2 地点堆積状況

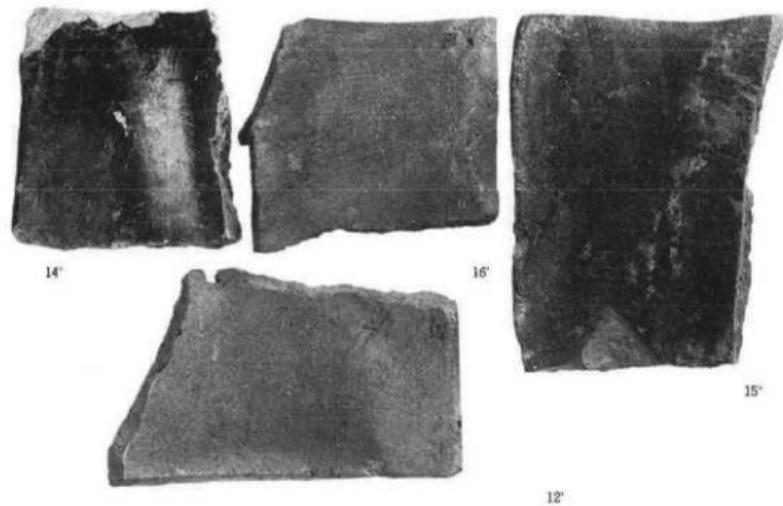


3. Ⅰ区調査風景

圖版第十四 若江遺跡第45—1次調查
遺物

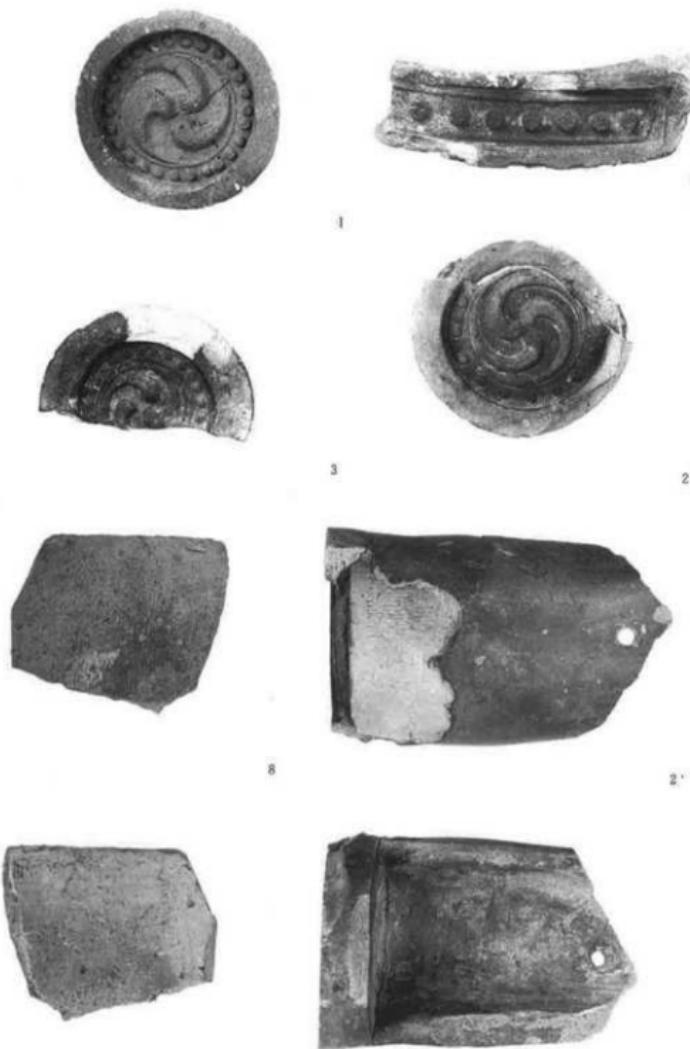


1. 平瓦



2. 平瓦

圖版第十五
若江遺跡第45—1次調查 遺物



軒瓦·平瓦



1. 断面 I



2. 断面 II

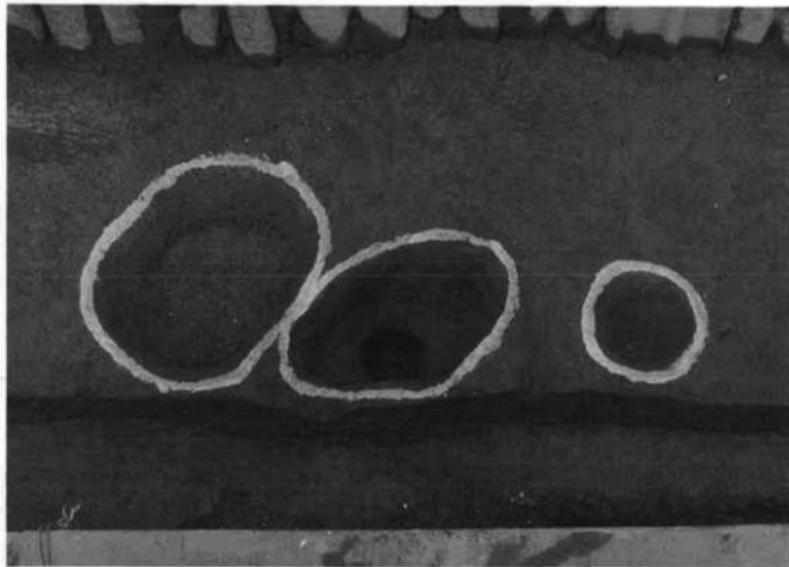


1. 井戸1

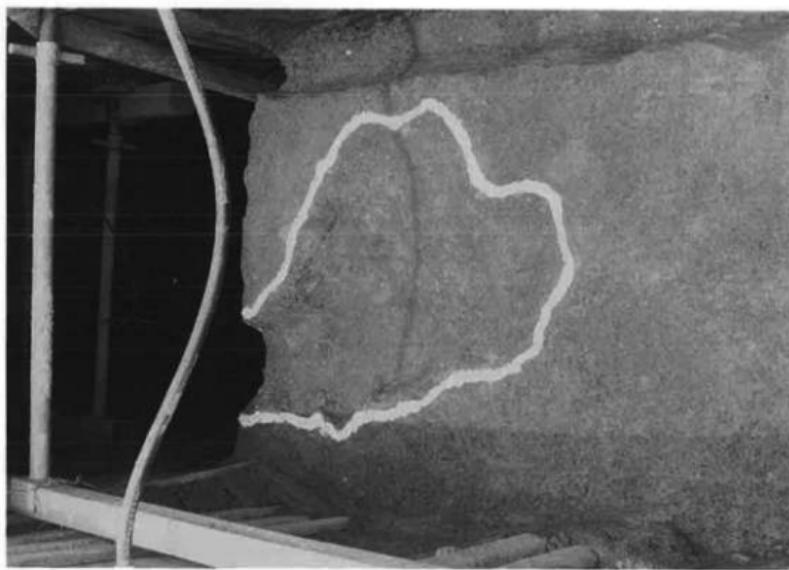


2. 井戸3立ち削り

図版第十八 若江遺跡第45—2次調査



1. ピット4～6



2. 土壙4

圖版第十九 岩江遺跡第45—2次調查



1. 莘生人足跡

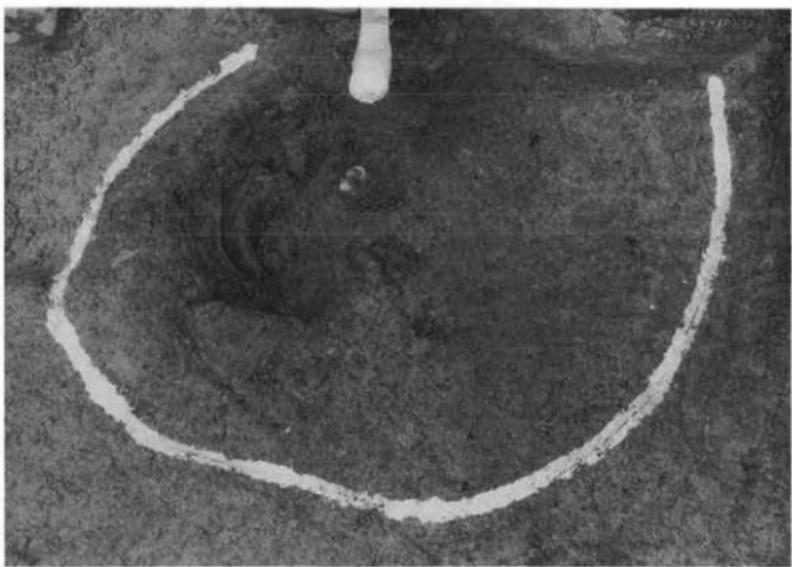


2. 包含層內遺物出土狀況

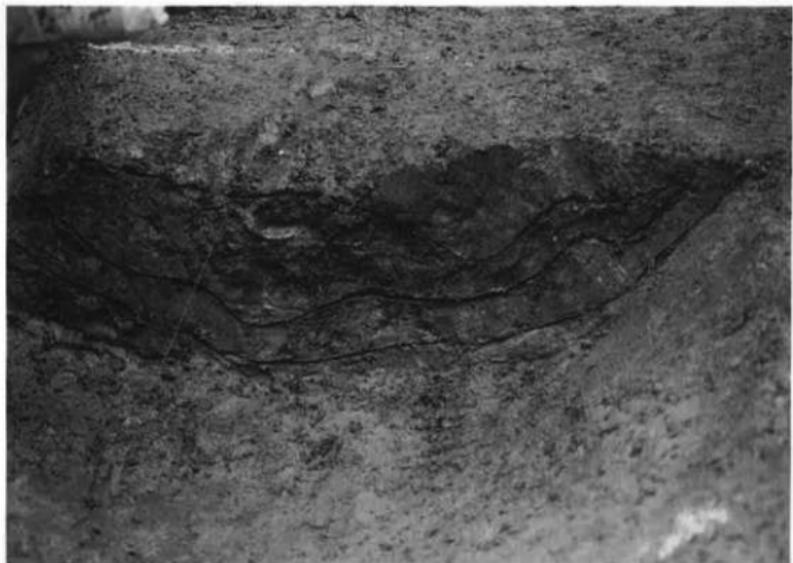
圖版第二十 若江遺跡第46次調査



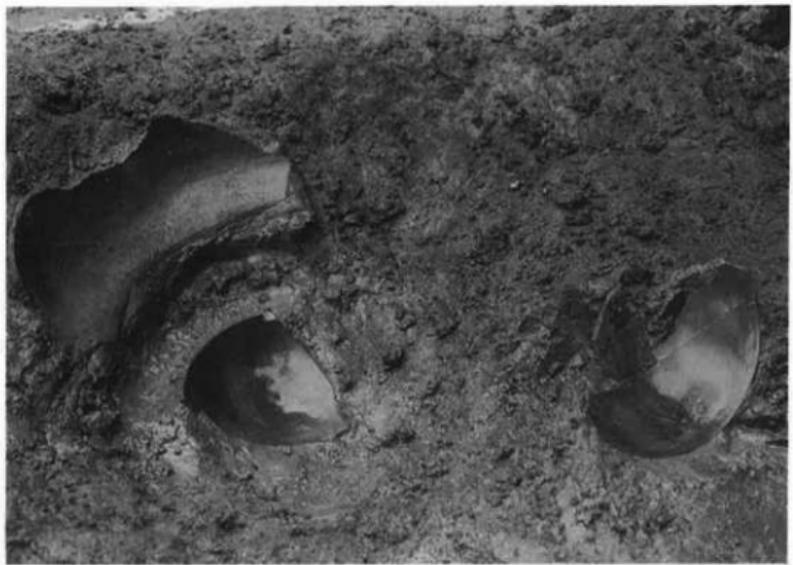
1. 立会調査風景



2. A地区土壤 1



1. A 地區土墩 1 斷面



2. A 地區土墩 1 內遺物出土狀況

圖版第二十二
若江遺跡第46次調查



1. A 地區南壁斷面上部



2. A 地區南壁斷面下部

圖版第二十三
若江遺跡第46次調查

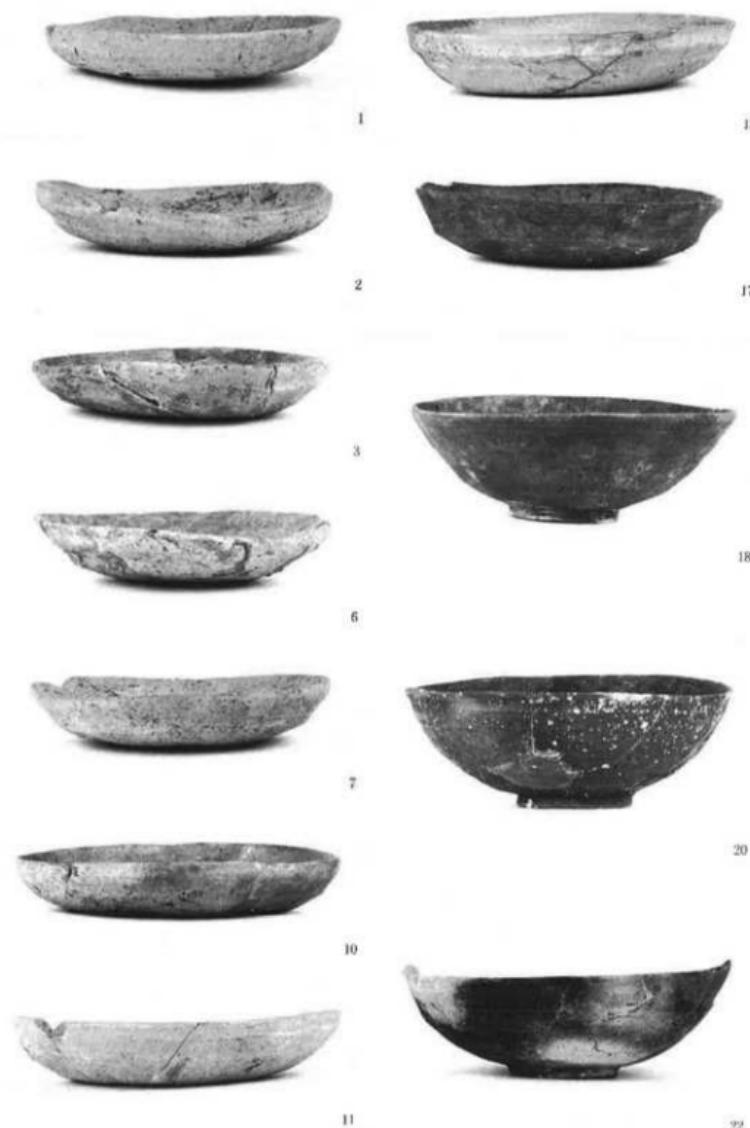


1. B 地區南壁斷面上部



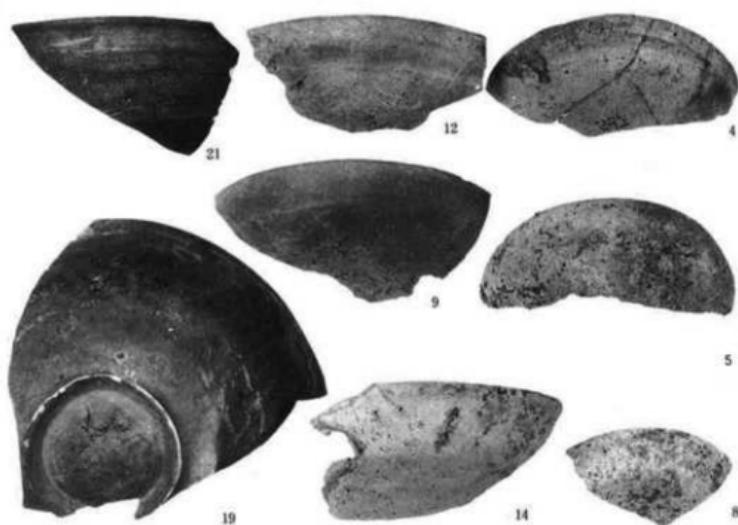
2. B 地區南壁斷面下部

圖版第二十四
若江遺跡第46次調查
遺物



A地区土壤Ⅰ出土遺物

圖版第二十五
若江遺跡第46次調查
遺物



1. A 地區土壤 1 出土遺物



2. A 地區土壤 1 出土遺物

圖版第二十六
若江遺跡第46次調查
遺物



29



36

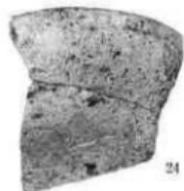


31

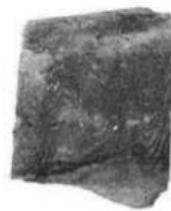
1. A 地區包含層出土遺物



23



24



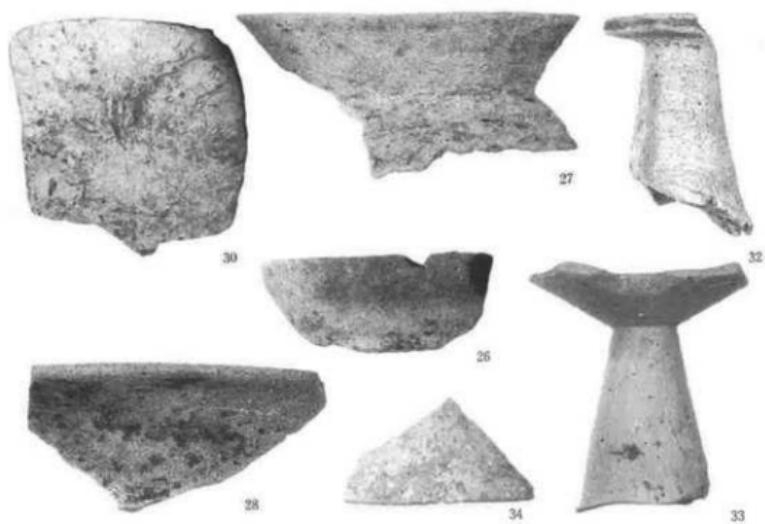
35



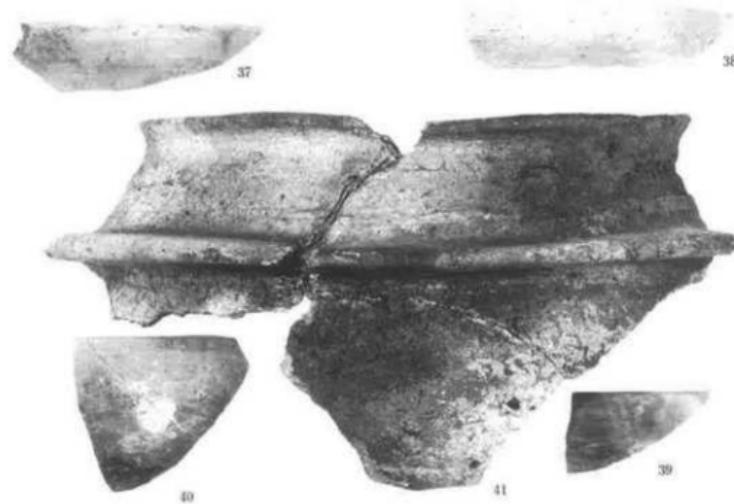
25

2. A 地區包含層出土遺物

圖版第二十七 若江遺跡第46次調查 遺物



1. A地区包含層出土遺物



2. B地区包含層出土遺物

國版第二十八 若江遺跡第47次・山賀遺跡第5次調査



1. B地区
調査地遠景



2. B地区
基本層序



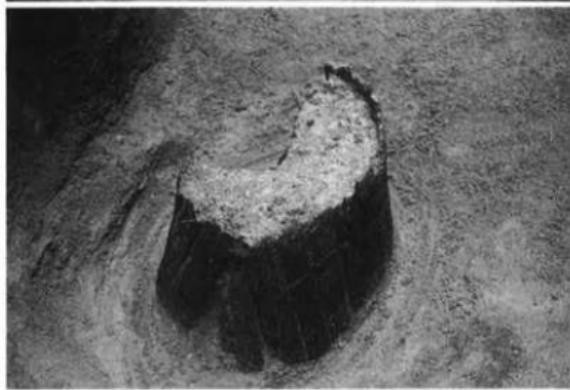
3. B地区
杭

図版第二十九
若江遺跡第47次・山賀遺跡第5次調査

1. C地区
井戸1上段



2. C地区
井戸1下段



3. C地区
溝1・ピット1



東大阪市下水道事業関係
発掘調査概要報告

-1991年度-

1992年3月31日

発行 財團法人東大阪市文化財協会
東大阪市兎川3-28-21

TEL 06-736-0346

印 刷 田中書店